

元気な地域のかたち創造ワークショップ 公開アドバイザーミーティング

2009年12月12日(土)15:00～
北上市生涯学習センター 第1学習室

I. 開会

II. あじさい型集約都市とは

いわてNPO-NETサポート 高橋 敏彦

III. アドバイザーからの情報提供

1. 集約型都市の実現に向けて

～北上市の交通特性と方向性～

若菜 千穂氏

(いわて地域づくり支援センター常任理事)

(1) はじめに

今、北上市では交通ビジョンの作成をしまして、そのお手伝いを私のほうでしています。その紹介をするということと、集約型とは何だろうかという辺りをご紹介したいと思います。

一つは香川県・高松市の事例をお持ちしました。この事例はわたしがかかわったのではなく、学会に行ったときに耳にはさんで、これは素晴らしいと思ったので、ご紹介したいと思います。

集約型都市のまちづくりを平成19年ぐらゐからやっています。二つ目は北上市の場合ということで、交通ビジョンを作っていますということ、そのなかで集約型というのはどう考えられるのだろうかという情報提供できればいいなと思っています。

(2) 香川県・高松市の場合

高松市、香川県もそうなのですが、平成19年の10月に「集約型都市構造の実現に向けたまちづくり基本方針」というのをつくっています。これはホームページでダウンロードして見ることができます。都市マスにからめて、都市マスの方向性として集約型を打ち出して具体的にこのように進めていこうということが書かれています。

内容は三層の集約拠点からなる都市構造ということで打ち出しております。さらに私がお

もしれいなあと思ったのが、その都市構造と土地利用の交通戦略を併せて提案、取り組みを考えられているということで、キーワードはチェーンモビリティ、連鎖交通環境という言葉で訳されています。

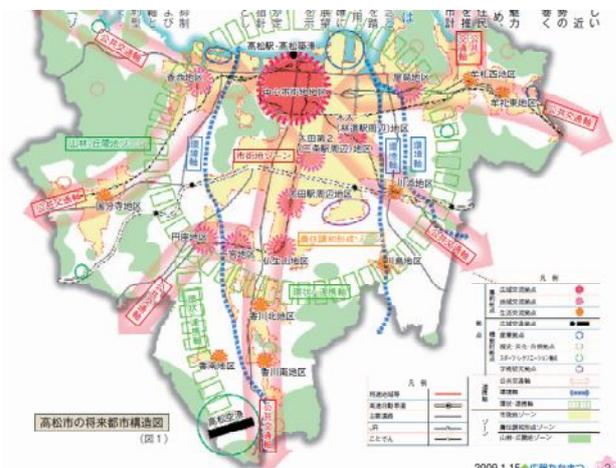
1. 香川県・高松市の場合

- 平成19年10月
- 「集約型都市構造の実現に向けたまちづくり基本方針」
- 三層の集約拠点からなる都市構造
 - 広域交流拠点
 - 地域交流拠点
 - 生活交流拠点
- それを実現するための土地利用交通戦略
 - チェーンモビリティ(連鎖交通環境)

多核連携型
コンパクトシティ

参考文献:
「新・高松市都市計画マスタープラン」、平成19年、高松市
「集約型都市構造の実現に向けたまちづくり基本方針」平成19年、香川県
「多核型コンパクトシティとチェーンモビリティ実現のための土地利用交通戦略」、豊嶋他、土木計画学研究、2008

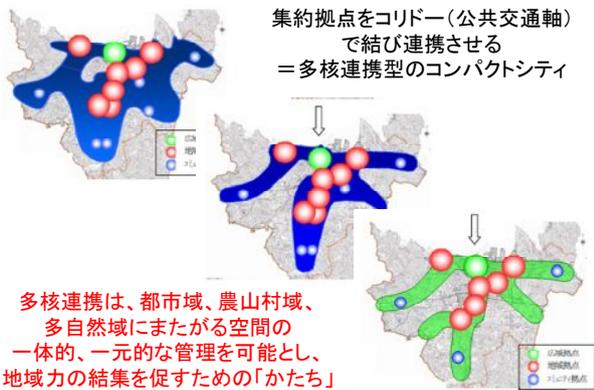
三層の集約拠点というのをこちらのほうでは、多核連携型コンパクトシティと呼んでいるようです。これは広報の資料に載せられた都市構造図です。凡例で示されている通り、一層目の赤い部分が広域交流拠点、二層目のピンクの部分が地域交流拠点です。三層目がもう少し郊外にある黄色の部分が生活交流拠点です。この3つを拠点として、それぞれを公共交通で結んでいくという描かれ方をしています。



現時点では、居住地や施設が広がっているの

を、少しずつコリドー（公共交通軸）で結び連結させてコンパクトにしていこう、一つの拠点に集中させていくというのではなく、コリドーに集約させていこう、その中で公共交通が一つの役割を担うかたちで位置づけられていると、私の方では理解しています。

集約拠点と多核連携型コンパクトシティ



多核連携型コンパクトシティということですが、多核連携とは、文章を引用していますが、都市域、農山村域、多自然域にまたがる空間の一体的、一元的な管理を可能とし、地域力の結集を促すためのかたちということによって表現されておりました。

それぞれの3層の拠点の条件も比較的細かく定義されております。範囲を見てみると、広域拠点については主要施設から半径2kmの円におさめていこうというような描かれ方をしています。

集約拠点の配置と要件

	広域拠点	地域拠点	生活拠点
居住	DIDが存在する	DID、準DIDが存在する	地域の自助努力により、格上げは可能
公共交通	複数の鉄道路線があり、結節点がある	鉄道駅がある	鉄道駅またはバス停がある
拠点施設	大学、高次の救急医療機関、国や県の拠点機関	役場、支所、高校	小、中学校
商業	新中心市街地活性化基本計画区域	近接する30以上の店舗	同左または1000m2以上のスーパー
範囲	主要施設から2km以内	主要施設から1～2km以内	主要施設から1km以内

先ほど、円で描かれた生活拠点は必ずしも、あなたの所は生活拠点ですと決めるのではなく、地域の自助努力によって生活拠点が大きくなってくれば、私たちの拠点は生活拠点ではなく地域拠点にしてください、例えば、50年後に

はその地域拠点が広域拠点にも格上げし得るというような定義がされていました。

また、2km・1kmといったエリア内においては原則、公共公益および大規模な集客施設の立地は認められないという政策制度が取られています。

こういった都市のあり方に対して、公共交通はどのような関わり方をするのかということですが、多核連携型のコンパクトシティとはインフラ集積と公共交通に支えられた拠点エリアが場所機能だけでなく、交通の結節機能の結合機能、この両方を担っているのが拠点である、交通の結節点であることも兼ねるからこそ、立地効率性が発揮されるということで定義づけられておりました。

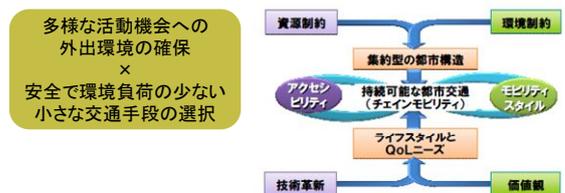
(3) チェインモビリティの実現

都市を集約させていかなければならない、それは財政的な面でもそうです。そういう現実の一方で、人の生活、人という視点で見ますと、多様化している生活リズムへの対応も一面では求められています。施設を集約させていけばいいという一方で郊外型の大きな店舗にしたいというニーズもあります。

それから、交通の面では公共交通の利用者が少ないということも言われています。いろいろなところに皆行きたがって、昔のように、まちの真ん中にドンと連れてくればニーズが足りるというわけではないという現実があるのかなと思います。

チェインモビリティの実現

- 多核連携型のコンパクトシティ像
 - インフラ集積と公共交通に支えられた拠点エリアが
 - 場所機能と結節機能との結合機能(＝立地効率性)を発揮する
- チェインモビリティ(連鎖交通環境)
 - 集約型の都市構造が求められる
 - 多様化した生活ニーズへの対応も必要



このようなニーズに対して、チェインモビリティという言い方をしているのですが、多様な活動機会への外出環境を確保しつつ、安全で環境負荷の少ない小さな交通手段も用意してい

かなければならないということで、このニーズに対応していく公共交通の考え方はこの2つなのかなというかたちになっています。

これを具体的に見ていきますと、低密度な市街地のままでマイカー社会からの脱却は難しい、2030年に化石燃料がなくなるのを目前にしてこれは何とかしなければならない問題なのかなということです。

公共交通指向型まちづくりと多様な交通モードを結ぶような取り組みが、公共交通のあり方を考える上では必要になってきます。ただ、バス路線を引けばいいというだけではなく、ソフト面でも重要になってきているといった指摘もしたいと思います。

チェーンモビリティの実現

- 低密度な市街地のままでマイカー社会からの脱却は不可能
- 公共交通指向型まちづくりと多様な交通モードを結ぶ
 - ハードとソフト両面でのシステム整備

多様な活動機会への
外出環境の確保
×
安全で環境負荷の少ない
小さな交通手段の選択

チェーンモビリティ
(連鎖交通環境)

公共交通は、単なる移動手段ではなく、「共」をはぐくむ社会装置である。

というのは、利用者がどんどん減ってきているので、住民の方自らが公共交通を企画してみんなで支えていきましょうという話を私はあちこちでさせていただいています。その中では公共交通というのは単なる移動手段ではなく、生活を支える一面、地域のコミュニティを支える社会装置であるという位置づけでなければ公共交通自体が、特に地方では維持できないというような現状があるかと思っています。

(4) 北上市の場合

北上市の現状と北上市の公共交通ビジョンのなかでこれから考えようとしていることをご紹介したいと思います。

図は、北上市の範囲と人口をメッシュで示したものです。白い線が高速道路、赤い線が国道、それから新幹線とJRが走っています。施設は小・中学校、総合病院、大型商業点を載せています。そして、円を半径2kmで引っ張ってみました。けっこう2kmの中で納まっているというのはあるのですが、とはいえ、周辺にもポ

ツポツとあるのがわかると思います。

2. 北上市の場合

- 施設と人口の分布
 - 中央に人口の4割、施設の集積
 - その他の地域に施設が散らばる

集約拠点をどう配置するか
どのようにコリドー化するか

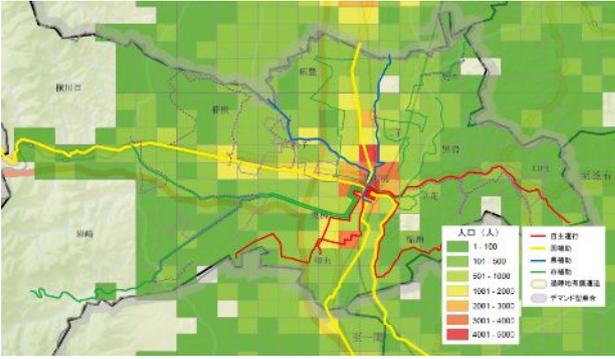


一極集中ではなく、16地区あるので、生活交流拠点なり地域交流拠点という考え方で見ると、どのように16地区に配置するか、それをどのように結んでいくのかというあたりがポイントなのかなあとと思っています。

現状なのですが、駅があり、黄色が他市町村とを結んでいる、国の補助を受けて走っている路線、全体的に見ると放射状にバス路線が引かれています。

2. 北上市の場合

- 放射状に伸びるバス路線
 - 基本的には、昭和30年、40年代に引かれたライン



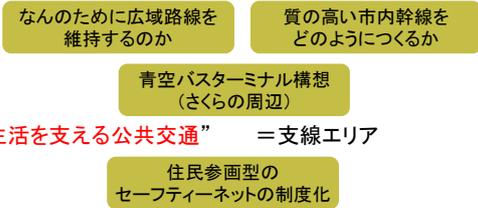
青いところが県の補助を受けて走っている路線、赤いところが全く補助を受けずにバス事業者さんが自分の収益の中で走っている路線です。事業者さんに「どうしてこういう風に路線をひかれているのですか」と聞いても、「30、40年ぐらいからほとんど変わっていないところが多い」ということです。

一般の目で見ると、事業者さんはちゃんと考えていて、利用者が多く儲けられそうな所にひいているのかなと思うのですが、最初にひいた所がそのまま残っているというのがほとんどで、全国的に見ても同じ状況です。

このようなラインを引き直すのか、戦略的に配置させていくのがビジョンに求められていくところなのかなと理解しています。

北上市公共交通ビジョンの基本的な考え方

- **公共交通ビジョンのねらい**
 - まちの将来像を見据え、生活を支え、暮らしをよりよくしていくため
 - 公共交通の基本的な考え方、姿を明らかにする
 - その実現に向けた取り組み方針を定める
- **基本的な考え方(案)**
 - “**都市構造を育てる公共交通**” = 市内幹線、広域路線



ビジョンのねらいは、私の提案ということでは聞いていただきたいのですが、まちの将来像を見据えて、生活を支え、暮らしをよりよくしていくための公共交通の基本的なあり方を示す、こういう方向に向かっていくということ、それに向けてどういうことをすればいいのか具体的な内容を盛り込んでいきたいと考えています。今、検討中の内容ですが、都市構造を育てるような公共交通というありかた、生活を支える公共交通、2つの面で考えていかなければならないのではないかと考えています。

2つとは、都市構造を育てる公共交通というのは市内の幹線です。南北のラインと西に向かう、横川目まで伸びている市内の幹線を充実させて、コリドーとして集約させていくような路線、便数を30分に1本というようなヘッドダイヤにしていくような話をしています。

広域の路線は北上市、あるいは周辺でも北上市に通ってくる人や北上市から近隣に通う方も多いです。そういった方の足を支えるという意味での広域路線です。

広域路線というのはほとんど国や県の補助が入って維持されているのですが、それは未来永劫続くわけではなく、いつ補助が打ち切られるかわからないので、そういったときに市として広域路線を維持するのか、維持するのであれば何のために維持するのが考えられてきていないというのが現状ですので、これを今考える必要があるということです。

市内幹線については30分に1本あるような

質の高い市内幹線をどのようにするか、明確に示したいと思います。

もう一つは、まちの周辺、さくら野の周辺に全ての路線が来ています。そこを高松市の例でいうと、広域交流拠点として育てるために、バスターミナルのようなものを設けてもいいのではないかと案もあります。



生活を支える公共交通の部分では、生活の社会基盤としての公共交通というのはそこに住んでいる方と一緒に考えなければ、絵に描いたモチになってしまいますので、住民参画型のセーフティネットの制度化、住民がここにバス路線が必要なんだということを声をあげていただいて、それを市として受け止める制度をつくっていくという検討をしています。

2. 地域再生の道

鈴木 浩 氏

(福島大学共生システム理工学類 教授)

(1) はじめに

地域再生の道

2009.12.12 北上市

鈴木浩

福島大学共生システム理工学類

今日僕がお話しするのは、中身はコンパクトシティなんですけれども、ここ 10 年以上になるのでしょうか、96 年からですね、コンパクトシティを考えてきましたけど、なぜコンパクトシティなんて考えたんだろうかと。

究極の目標は、僕の言葉で言うと、地域再生です。

要は、これまで日本の都市計画だと色々なことが、主に都市計画で言うと、高度経済成長期に、1968 年に、新都市計画法というのは改正されました。その前は 1919 年ですから、およそ半世紀ぶりに都市計画法が改正になって今の骨格が出来ました。

しかし、その骨格は今考えてみるとやはり高度経済成長戦略の都市政策版、こういうものです。今になってそのあちこちに破綻をきたしている、というのが今日の都市計画だと思います。

もう一つは、都市計画法自体がやっぱり大都市、極端に言うと東京の都市計画を地方に当てはめていく、こういうような枠組みでこれまできましたので、もちろん地方では色々破綻をきたすのは当たり前だと、こんな風に思ってきました。

それで私たちは地方都市をどうするか、日本中がその問題をようやく考えるようになってきた。東京の極端な巨大化と地方の極端な衰退、空洞化、この極端な格差が地方都市に目を向けるような、こういう広がりが出てきた。

それはなぜだろうか。

僕たちが住んでいる地域をもう一度再生さ

せたいということだと思います。

実は、1980 年代ぐらいから EU の国が一番最初に取り上げたのは、実はこの地域再生です。

一つの極、アメリカという経済の極、それからそれに対抗するために EU の経済政策をやるというのが EU の戦略ですけども、その内政上の課題は地域再生です。

EU の中で国家間の、あるいは都市間の格差を作らない、これが今日まで続いている EU の戦略です。

そんなことを色々見てくると、僕たちが今考えないといけないのは何なのか、ということをおぼろげに思わずやっぱり、改めて考え直さないといけないなと思って今日、話をします。

(2) 「世界を読む」、「時代を読む」、「地域を読む」とは

最初から変なことを書いてありますけれども、実はこの 11 月 10 日の日に、私は 1 年間、福島県の総合計画を、ようやく 1 年間ぐらいかけて総合計画を策定して、知事に諮問してきました。答申してきました。

今回の県の総合計画はコンサルタントには一切頼まないで、県庁の職員と我々で作ろうということで、それから県内で 33 回ほど地域懇談会、こういうやり方でやってきました。

その時に県庁の職員の方々に僕はぜひお願いしたいと思ったのは、地域の、地方の、そういう総合計画であっても、この点が必要だということをずっと言ってきました。

一つはやっぱり世界の動向だとか、世界の中での日本、あるいは世界の中での例えば北上というのはどういうことなのか、というようなことだとか、「時代を読む」、あるいは地域はもちろん読まないといけない、こういうのがすごく重要なんだということの話をしてきました。

(3) 「世界を読む」

実は今年の 4 月ぐらいだったですかね、日総研というところの理事長をやっている寺島さんに来てもらって、今世界がどういうことになっているのかという、そういう中で日本というのは今どういう立ち位置にいるのか、ということをやっぱり勉強しました。

それには知事も実は参加してもらったりして、そういう世界に高いアンテナを張るという

ことも、たとえ地方自治体でも重要だな、というようなことを実は考えながら総合計画を立案していました。

私たちは地域再生を考えるときにも、今ですね、例えば世界の資本は、それが良いというわけではありません、世界中の都市を、例えば先ほど言葉出てきましたけれども、生活の質というのを横並びに見る力がデータで出てきます。

そうすると色々な経済活動だとか文化活動をする時に、生活の質が高いところはどこなんだろう、それに基づいて交流を深めていくということが世界の中で起きているわけですね。

EUの戦略の中に、生活の質、Quality of Lifeをきちっと位置付けたのはそういう背景があるからです。

ところが今ご承知のように、日本の諸都市、地方自治体で生活の質を、その地域の生活の質をデータの的にきちっと示している所はほとんどありません。これを寺島実郎風に言うと、EUは世界を読みながら生活の質戦略を今やっています。こういうような流れを見るときに世界を読むというのはすごく重要なんだらうと、こんな風に思います。

それでなぜ僕はこれを取り上げたかという、去年の暮れから出てきている、例えばこの金融経済の破たん、それが実体経済とかかけ離れる。グローバリズムは一方で言いながら、一方でローカリズムが大切ですねという議論がようやく出てきた。貿易拡大が破綻したと思うと今度は、内需拡大。機転を利かせてこれをいち早くやったのが、中国だったりします。

それから、ホリエモンに代表されるような、小泉純一郎の時代に、ホリエモン自体が時のヒーローだった。こういうヒーローだったもの、それは何かと言うと、金融経済中心だったということもありますけれども、ハイリスクハイリターンの価値観、カジノ経済と言ったりします。そういうものが時の寵児としてもてはやされている、というような風潮を日本の中で少しずつ、あるいは確実に根付かせてきました。

でも不思議なことに一方で、皆さんも色々な所で聞くとありますが、持続性だとか、持続可能性の追求ということがあちこちで言われます。

立ち止まってちょっと考えてみてください。

ハイリスクハイリターンの価値観と持続可能性は両立しません。絶対に両立しません。

そのこの所が今混在をしてしまっている、ということですね。それからこれは、ヨーロッパの国が各国必ず言っていることですが、効率性と公正性のバランス論です。これがブレます。

日本の優秀経済は効率性を求める、そのために公正性は損なわれる、この点をEUの諸国は、それではだめなんだ、やっぱり公正性を前提にした効率性、あるいは効率性のある程度考慮した公正性、この議論がたくさん行われています。蓄積されています。

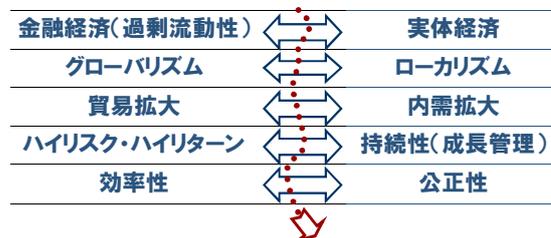
日本ではどうかというと、効率性一本槍になってしまった。それが今日の格差拡大の姿です。

こういう世界を読みながら色々な事が見えてくる、というのが実はすごく重要なことのように思います。それでここで書きましたように、どうも日本では対局をなすようなことがブレている。

▶「世界を読む」

2008年秋以降の世界的金融・経済危機をどうとらえるか

乖離・矛盾・分極化



そこに乖離だとか矛盾だとか分極化が起きる。それでその中に、例えば我々は、この赤いポンポンと書いているのは、ここいらをブレながら私たちはどこに行くのかよくわからない。

21世紀に入りましたけれども、日本では大写真を描けていません。

地域社会はもちろんです。

こういうような時代にいるということをひとつ考えないといけない。

(4)「時代を読む」

それで「時代を読む」というのは、今どんな時代かというのは、今言ったような話です。それから、とにかく子供から若者たち、あるいは高齢者まで、とにかく生き難さの中で生きているというのは誰もが段々認識してきた。

しかし一方で、「共感」だとか「共鳴」だと

か「協働」だとか字が違う「共同」ですが、そういうことがようやくあちこちで大切だと思いはじめてきた、こういう時代です。

なお、生き難さと言うのは、どんどん深刻な状況が生まれています。これを私たちは時代のある種の局面として、どう我々が共有していくかということも重要である、こんな風に思いません。

次世代に何を継承するか私たちは何にも見えていません。私たちの地域社会。北上の都市の姿をこのまま次の世代に申し送りができるのでしょうか。あるいはそうでないとしたら、どういう都市の姿を次の世代に申し送りをしようとしているのだろうか。

これが今描けないでいるんです。そういうことも実はすごく重要な問題で、僕たちは今ヨーロッパの国と比較してみると、子供社会にいるなど私は思います。

▶「時代を読む」

・今はどんな時代か

**乖離・矛盾・分極化による“ゆらぎ”の中で。
子供・若者たちから高齢者まで“生き難さ”の中で。
共感・共鳴そして協働・共同へ。**

・次世代に何を継承していくのか(世代継承の課題)

**歴史・文化の共有と継承。
どんな価値観を継承できるか。**

「大人社会」から「子供社会」へ、そして・・・

・民主主義がどう発展してきたか、今後はどう見通せるか 「多数決」の危うさ、無関心や気配りの欠如の危うさ。

ヨーロッパの国は、例えば一例を挙げますと、夜7時以降に子供、例えば12歳以下の子供は、レストラン・コンサート、色んなものに連れていくことはできません。大人の社会なんです、夜は。

そうすると子供たちは家で留守番をして、例えばベビーシッターという制度が発達したのもそのせいなんですけど、ベビーシッターに子供を預けて、夜大人たちが街に繰り出して、コンサートを聴く、レストランで楽しむ、こういうことになる。

こういうことが今でも根付いていますので、子供たちは早く大人になりたいと思うんです。今でもそうです。

でも日本は大人たちが、どんな小さな子供で、どんながなりたてようと、レストランだろうとどこでもかわいらしく連れて行きます。物がたくさん有り余っています。

子供たちの中には、一番豊かな社会が子供の

時代に訪れる、それで大人の、親の姿を見ていると疲れきっている姿を見るので、こんな親にはなりたくないなどみんな思い始める。こういうのを私は子供社会と呼んでいます。

それに比べるとヨーロッパは大人社会です。子供たちが大人になりたいと思う社会です。日本は子供たちが大人になりたいなど思っている社会です。

こここのところをどう切り変えるかというのも地域再生の課題であるかなと思っています。

誤解を恐れずに言うと、私たちは小学校に入ってから以来、小・中・高・大学・現実社会、このあらゆるところで多数決という民主主義的な方法を私たちは体得して、これを色んな応用問題にも使っています。

しかしまちづくりに関する限り、他のものもそういうことが言えるかもしれません。まちづくりに関する限り、いかに少数意見でもその人たちの価値観や立場や要求をそのまちづくりの中に反映させるか、これがまちづくりの懐の広がりになります。

でもこれまでのまちづくりは元気のいい、男たちの、権力者の、こういう人たちがまちづくりに関わってきた、その姿が今の姿です。

そういうことも私はある意味では多数決の危うさを感じます。こういうトレーニングを実は、私たちは子供の時から受けてしまっている。

これをどうしたら軌道修正できるのか、ということがこれからの課題であるかなと思います。

(5)「地域を読む」

「地域を読む」というところでは簡単にこんなことをお示します。私は、私たちの今地域が成り立っている、生活が成り立っている力には4つあるのではないかということ。

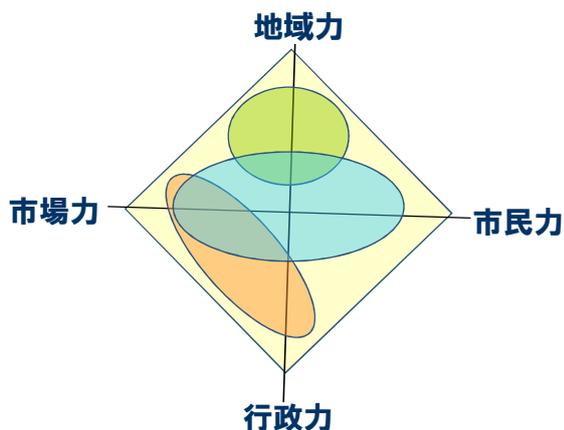
ここに一番わかりやすく言うと、私たちの生活の大部分を市場の力に委ねています。

皆さんの生活の7割から8割は商品によって支えられています。食べ物でも何でもそうですね。ところが、それで支えきれないことを行政による公共サービスとしてまかなってもらっています。

今日本人の多くは、市場の力と行政の力に依存していることが多いのです。いつの間にか地域力だとかそういうものはなくなってしまっ

て、今改めて地域の力ということがもてはやされるようになってきた。『ご近所の底力』と言う番組は、まさにここに着目したものです。市民力、市民一人一人が行政の不正だとか、企業の色々な問題に立ち向かうという市民の力はまだまだ弱い。

アメリカでは 1960 年代に消費者運動が高まりました。その消費者運動というのは、企業がへまをしたらその企業を倒産に追い込むほどの力を持っていました。そういうようなことがあって、実は欧米諸国ではこの市民力が非常に高い状況まで至っています。



さて、この4つがバランスよくあればいいんですけれども、現実の世界の都市を見ていくとちょっと抽象的ですけど、こういう国があります。この絵（緑の円）は市場だとか行政、市民力が非常に弱くて、地域力は高いということです。発展途上国の姿がこれに近いと思っています。ただいいと思います。

次のこの絵（青い絵）は、市民力と市場力は拮抗するほど高まっていて、行政の力はどんどん小さな、政府だとかコミュニティの力は弱まっている。要するに、これは欧米諸国の国です。

残念ながら次に書いたのが（オレンジの円）我が国の姿だろうと思います。要するに、先ほど言ったように、市場の力、行政の力が高まってしまった。極端に高まってしまった。今行政の力さえも実は市場に委ねようという、こういう力が働いています。

これが市場原理であり競争原理です。公共がやっていたものを市場テストをやって、市場にのるんだったらこれは公共から手放してしまえ、こういう勢力がいまだに力として発揮をしようとしています。

そんなわけで日本の場合の課題は、地域を再

生しようとする、この地域力だとか市民の力をもっともっとふくらましていかないと、地域再生につながらないのではないのか、というようなことを実は私なりに考えています。

▶「地域を読む」

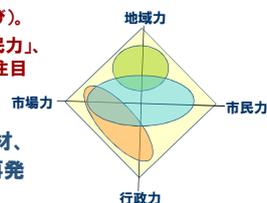
- ・なぜ地域社会(コミュニティ)再生が
- ・私たちの生活を支える四つの力

「市場力」と「行政力」への依存とそれらでは実現できない課題の山積(ほころび)。

社会的公正や民主主義を支える「市民力」、共助や協働を生み出す「地域力」が、注目されるようになってきた。

- ・地域に存在する自然・資源、人材、情報、歴史・文化、産業をどう再発見し、次に繋げていくか。

例:「介護保険」による在宅介護・人材派遣の悲劇



例えば、この下に介護保険のことを書きました。3,4 年前にコムスンという会社が営業停止になりました。僕はあんな人材派遣会社は潰れてよかったなと思っていましたけれども、でもその時にちょっと私にとっては大変な驚きを感じたことがあります。

僕はよかったなと思いましたが、実は地方の町村、特に地方部の町村が悲鳴をあげました。

今、全国で地方では雇用機会がない、若者が地方からいなくなってしまう、そうやって地方自治体は悲鳴をあげながら、この介護力を実は人材派遣会社に委ねていたのです。

それでこのコムスンが潰れてしまうと、実は介護をするホームヘルパーさんを派遣できない、こういうようなことになった。それでこのコムスンが潰れた後に、堀田力さんという、有名なさわやか財団の理事長が後始末のための検討会を作って、すでに収まりました。

東北地方はコムスンに代わってどこがやっているか。ニチイ学館というところが東北6県全部一手に引き受けることになりました。枠組みはほとんど変わりません。それで、私たちはこんなことで地域の本当に必要な、あるいは地域の力をそれに当てはめる、こういうことを見失っているわけです。

私たちが「地域を読む」、地域をどういう風に考えるか、こういうことであります。

(6) コンパクトシティとは

さて、その次のコンパクトシティということなんですが、私は簡単に今、色々なこれまで検

討をしてきて、いよいよコンパクトシティに向けた課題というのを6つに整理できるなと思ってここに書きました。

▶ **コンパクトシティとは**

周辺の農漁山村との有機的な連携の下に、市街地と農山漁村との共生的発展を目指した都市の姿をここでは、コンパクトシティと呼ぶことにする。

▶ **コンパクトシティ構築に向けた課題**

- ①人口減少・高齢社会
- ②中心市街地再活性化と街なか居住
- ③市街地と周辺農村との土地利用の整合化
- ④広域公共交通システムの再構築
- ⑤循環型地域経済システムの構築
- ⑥低炭素型社会への貢献

その前にですね、私たちはなぜ東北地方でコンパクトシティを言うか。欧米のコンパクトシティは大都市に端を発して、環境だとか資源だとかそういうことを背景にしてコンパクトシティがうたわれましたけれども、日本のコンパクトシティはちょっと違う、私はそういう違う位置づけ方をしています。

それはどういうことかという、日本のコンパクトシティが議論になったのは、地方都市の中心市街地の空洞化が激しくなってきた、市街地が拡大をする、これはこれからの地方ではもたないぞということで、都市ではもたないぞということで、コンパクトシティが出てきました。

それで、その際に注目すべきことを一つだけ皆さんにお話しします。

それはどういうことかという、市街地の拡大が今でも地方都市で行われています。我々が都市計画の教科書的な理解でいうと、市街地の拡大は、都市における都市活動が活発になる。

そこに都市活動が集積して土地が足りなくなってきたから市街地が外縁的に拡大する。これが最も都市計画の教科書的な市街地拡大の理屈です。現在の状況は全く違うのです。

どういうことか。中心市街地が空洞化しているにも関わらず、市街地が拡大しているんです。一方で拡大しながら、街なかを見たらさら地だとかそういうものがどんどんできています。

私たちが単純に都市計画の市街地拡大理論を言っていたものと全く違う状況が今生まれているわけです。この背景は何か。2つあります。

一つは農村周辺の農村側にプル要因が働いているということです。

市街地をひきこもうというプル要因が働いているということです。それは周辺の農家の人

達、農地、農業、そういうものがワンセットで将来の見通しを失ってきたからです。そうすると農業的な土地利用、それよりももうちょっと市街地の波をかぶさって、アパート経営だとかあるいは賃貸料を、借地にして賃貸料を手にする、こういうような動機付けが働いてきた、こういうことなんです。これが一つ。

このことを可能にしてしまったもう一つの理由は何か、モータリゼーションです。

都市の周辺の公共交通があろうとなかろうと、車社会になって、どこにでも車で行けるようになった。道路さえ作ればいい、ということで、実は周辺の農村のプル要因とこのモータリゼーションが実は働いてしまった。

ここの悪い循環を断ち切らないと、日本も、地方都市も、周辺の農村も、イカれてしまう、というのが現実の地方都市の姿なんです。

ここのところを私たちはようやくというか、なんのこともない単純な理解がようやくできるようになってきたということでもあります。

(7) コンパクトシティへの道とは

それで、6つぐらいの課題を全部説明すると時間がかかりますのでかいつまんでいきます。

コンパクトシティへの道

コンパクトシティモデルの構築

- ①人口減少・高齢社会への対応
- ②中心市街地再活性化と街なか居住
- ③市街地と周辺農村との土地利用の整合化
- ④広域公共交通システムの再構築
- ⑤循環型地域経済システムの構築
- ⑥低炭素型社会への貢献

(8) 人口減少・高齢社会への対応

人口減少社会・高齢社会を支えようというのは、もちろん残念ながら人口が今までの水準を維持することはもうほとんど絶望的であります。

そういうなかで私たちはどういう風に、例えば女性が安心して子供を産める、こういう社会にしていくのか。こういう社会になった結果として人口の水準が維持できるかもしれません。

とにかく芽を増やせよなんてことを、そんな

スローガンを言うことは無意味でして、どうしても安全に安心して子供を産んで子育てをできるか、そういう社会になるのかというところが、大きな課題になってきて、そのために、その子供を産む環境、子供を育てる環境、あるいは女性が安心して働ける環境、就業の場所、どういう姿になるのかというのが地域社会の姿です。

こういう地域社会の姿として、私はコンパクトシティ、それは周辺の農村と市街地が共存・共栄の関係にある都市の姿を、私たちはコンパクトシティと言っています。

ここの理屈がこれまでほとんどの人達に理解してもらえなかった。

都市側の勝手な発想だろう、農村を切り捨てるんだろう、というようなことでありました。でも東北地方で私たちが東北発コンパクトシティと言っているのは、ここの最初の原点が全く異なっています。

人口減少・高齢社会への対応

- ▶ユニバーサルデザイン、バリアフリー
- ▶男女共同参画社会、子育て支援
- ▶自己実現の舞台づくり
(都市や地域社会の舞台・土俵づくり)
 - ラウンドテーブル
 - Public Involvement
- ▶医療福祉、生活文化、居住環境、移動交通
(エリアマネジメント)
 - ネットワーク型都市形成 City-Region
 - 中心市街地の機能集積と空間特性
- ▶資産継承問題(不動産維持管理、後述)
 - Property Management

それで3つ目に書いた自己実現の場所づくりというのは、私はこれは福島県の総合計画の中に盛り込みました。自己実現という言葉をちょっと他の言葉にしましたけれども、福島県の総合計画の一番大きな理念というのは何かというと、福島県のどこに住んでいる人たちも、自分がしたいこと、自分が土俵の上のぼって自分がしたいことが何かできる、これが地域社会の中で見つけられる、こういう地域社会を作っていきたいというのが、福島県の総合計画のもっとも重要な理念になりました。

要するにそういうようなことが高齢社会の中では重要だろうと。

それから、もちろん福祉医療だとかこういう

ことが重要になってくるエリアマネジメントなんてことも今すごく重要になってきました。

もうひとつ、人口減少社会の中でまだ手つかずの課題があります。最後に書いたプロパティマネジメントです。

例えば人口が農村部で減ります、都市の街中でも減ります。子供たちを育てたけれども、子供たちが東京、都会に出てしまっただけで、帰ってきません。親御さんが維持してきた家屋敷が街なかにあっても、これを継承する見通しが全くないです。

それでお父さんお母さんが不幸にして亡くなると、この家屋敷は放置される、相続問題を受ける、面倒くさいからお金に換えてこれをお金で山分けをしてパーになる、そこにマンション業者が入ってくる、そのマンション業者も最近のように倒産をしてしまう。

こういうようなおかしな地獄絵の連鎖反応というような、要はですね、わが国では戦後特にそうです、不動産は私的所有の原則、あるいは絶対的所有権というのが、実は法律の世界でもそういう位置づけがされていました。とにかく絶対的所有権、不動産を持っていることが絶対。それが例えば土地神話だとかそういうことを生み出してきたんですけども、その結果、この縮小社会の中で資産の継承問題がバラバラになっています。

街なかでもそうです。農家でもそうです。農家で廃屋が目立つ、街なかでも、先ほど言っていましたように、空き地やそういうものが目立つ。こういうような状況が生まれてきてしまった。ようやく今これについて、やはりこれをどうやって継承するのか、個人任せで本当にいいのか、というようなことが出てきました。

今、花巻市に合併しましたけれども、東和町と言うのがありました。あそこの土沢商店街というところに、10年ほど前に何回か入り込んだことがあります。そこの商店街では、商店街の中で、商業を自分の家がうまくいかない時に、空き店舗になったときに、個人の処理に任せずに商店街としてその空き地をどういう風に使おうか、商店街としてそれを責任を持って申し送りをしてもらう、こんな取り組みをした時期があります。

何と、先ほど若菜さんが紹介された、例えば

高松市の丸亀商店街というのが、日本で最も典型的に、大々的にやった例であります。丸亀商店街では、商店街の中で商業を、店舗をやめてしまうと、商店街としてそれを全部借り受ける。

そしてその商店が前に経営していた一定の利幅については保障するけれども、商店街として新しい商業を始める、こういうような、言ってみると、プロパティマネジメントの先駆的な例でございます。

しかし先駆的と言いながら、その問題は全国各地でも横たわっています。これに行政も『それは個人の資産問題、行政は立ち入る問題ではない』としてこれまで避けて通ってきたのです。

でもあちこちでこういう問題が起きてきて、私は、北上の担当者の方が私の研究室にお見えになったときも、北上の中心市街地の問題はいよいよこれを考えるべきだ。まず最初の段階は、法務局の土地の台帳を借りてきて、ここ 30 年間ぐらいの間に土地所有権、あるいはその利用はどう変わっているか、その変異を調べてみてください、推移を調べてみてください、というお話をちょっとしたことがあります。

そうしてみると、恐ろしいほどその中心市街地の土地所有ががらがらと変わっています。不安定です。これが実は街中の衰退にも影響を及ぼしている、影の姿なんです。

このことについてほとんど誰もいじくってきませんでした。

私は自分が 1978 年に博士論文を書いた時から、ずっとこの問題を追っかけていて、福島市内でもこれをやってきました。それでようやく今、福島市、あるいは福島県、福島の商工会議所、このプロパティマネジメント研究会というのを立ち上げることにしました。ここいらに、肉薄しないと、実は最終的には土地持ち層がどういう要求をもっているのか、どういう挙動をするのか、中心市街地の問題を解決できない、大きなネックがそこにあります。

地方の農村部もそうです。廃屋になっているけれども、その家族じゃないとそれに手を出すことができない。そうではなくて、その集落で、あの廃屋、こちらの空き地、どうするか、共同で考えるような仕組みをこれから作っていかないといけませんね。そういうことを含めてそれをプロパティマネジメントと呼んでいます。

(9) 中心市街地再活性化と街なか居住①

実はですね、ここで2つ目のしるしで「郊外立地施設の街なか誘導策」。これは私が時々紹介しているんですけども、これはここ 10 年ぐらいの間にどんどん郊外に出て行ってしまった、これをすぐに街なかに戻すなんていうのはもちろん不可能です。

でも僕たちのコンパクトシティは 10 年で成果が上がるとか、青森市の『アウガ』が経営不振になったので青森のコンパクトシティはもうだめか、こんな短絡的な評価はすべきではないと思っています。

中心市街地再活性化と街なか居住①

➤中心市街地再活性化は周辺農村部の土地利用政策の確立と密接不可分(後述)

➤郊外立地施設の街なか誘導策

・50年位の長期的な戦略と戦術が必要

・中心市街地のインフラの維持管理、郊外対応のインフラ整備の費用便益シミュレーションが必要

➤複合的土地利用・空間計画の促進、パイロット計画の推進

都市計画法による地区計画、景観法による重点地区計画など

そのひとつの例を、僕は福井市に行ってお話を聞いてびっくりしました。福井市では多分にもれず、地元のテレビ局と新聞社が農村部に立地してしまいました。そのあとに追い打ちをかけるように色んなものが郊外に出ていきました。

商工会議所、市役所の方々が戦略会議をしているときに、こういう作戦を練ろうと議論をしていて、それでいこうじゃないかと僕は応援しましたけど、どういうことかと言うと、商工会議所と市役所の人がこの新聞社とテレビ局に、毎年ですね、今度建て替える時には街なかに戻ってきてくださいという、要するにそういう挨拶に毎年行くことにしています。

今度戻ってくる時、50年後かもしれない、100年後かもしれない、その時のことを考えて実はそういう挨拶、お願いに行っているわけです。

もうちょっとこれにはしぶとい戦略があります。これをテレビ、新聞、そこのテレビ局だとか新聞社を利用して、報道してもらうんです。どういう効果を狙っているかという、福井市の街なかに立地している企業、ここから出てい

きたいと思っている企業、あるいは福井のどこかに立地しようと思っている企業に対するメッセージです。

今福井市では、このぐらい街なかを大切にしていって、街なかのことを考えている、それで郊外に出て行った大きな企業に対して戻ってくるように要請している、このことを今立地している企業たちにメッセージを送っている、こういうことです。

こういう複合的な戦略を立てる、というようなことが今できつつあります。そういうことを考えるところが出てきました。それから中心市街地のインフラの維持管理と、郊外にどんどんインフラ整備することの費用便益シミュレーションということを行う研究者も出てきました。

(10) 中心市街地再活性化と街なか居住②

最近、高松に本社のあるマンション業者が倒産をしてしまいました。会社更生法にひっかかってきました。東北地方の、特に県庁所在都市、20万以上の都市ぐらいには『サーパス』というマンションがたくさん並んでいますけれども、あれが街なか居住のモデルかと言われれば、私はノーであります。

街なか居住の、ああいうのも一つの手段かもしれない、一番重要なことは何か。今まで住んでいた居住空間として使っていた、例えば商業との併用住宅かもしれない、工業との併用住宅かもしれない。それが街並みを形成し、地域社会を形成していた。これがある所で断絶してしまう。このことが問題で、新しい形にいかにかに継承していくのか、この課題に答えないと意味がないと思っています。

だからこれまでの居住者、お年寄り、次の世代にどうつないでいくのか、地域社会としてそれをどう位置付けるか、こういう取り組みが重要なんだろう、こんな風に思っているわけです。

東京なんかではこういう取り組みが生まれてきました。共同建て替えなんていう言葉を使ったりして、地域社会の人たちが、地権者が、複数で共同住宅を造る、あるいは1階にはその店舗を造る、こういう事例が生まれてきたりしましたけれども、全国的にまだこれが普及するといった段階まで行っていません。

先ほど言いましたように、街なか居住を推進

しようとする、プロパティマネジメントだとか、そういう人たちが、マネジメントをする、そういう専門家が必要だと思えます。

私が福島県や福島商工会議所でこのプロパティマネジメント研究会を始めたのは、こういう戦略を考える為の専門家をどういう風に育てていくか、ということをして日本商工会議所というところでもこの戦略を今考えています。

できればこういう地方自治体の中で、商工会議所だとかそういう所で一緒に考えていただけるといいと思えます。

中心市街地再活性化と街なか居住②

▶コンパクトシティ型「街なか居住」

- 地域コミュニティ再生を目指した街なか居住
- 居住継続、持続可能性の高い居住空間とライフスタイル
- 都市型利便性と環境共生性と関連つけた複合的・共同的土地利用に基づく居住空間

▶「街なか居住」推進の専門家

- プロパティマネージャー(仮)/建築家、不動産鑑定士などに付加的に与えられる資格として創設してはどうか。
- エリアマネージャー(仮)/建築家、都市計画プランナーなどに付加的に与えられる資格として創設してはどうか。

実は不動産鑑定士という資格があります。この不動産鑑定士というのは、今の所、今後の課題のプロパティマネジメントというのにはちょっとそぐわない、要するに今東京です、中古のビルディングが海外の資本にどんどん買い占められています。買いあさられています。その時に値付けを不動産鑑定士はできないんです。

アメリカのいわゆるプロパティマネジメントを勉強した若い専門家たちが、この日本の中古のビルを見て、これをイノベーションしたらどのくらいの金が必要か、何年使う、どういう企業が入るとどのくらい採算性があるか、そこまで全部シミュレーションして、だからこの中古ビルは10億円です、こういう値付けをします。日本の不動産鑑定士はこれできません。築何年が最も重要な評価基準です。あるいは周辺の地価が最も大きな評価基準です。今まったく新しい評価基準が求められている、ということでもあります。

(11) 市街地と周辺農村との土地利用の整合化

先ほど言いましたように、農村部と市街地との関係はこういうプル要因が大きく働いている、というわけで、私は今、市街地と周

辺農村との土地利用、あるいは土地利用のルール、こういうものについてもうちょっと整合的にしていく必要があるのではないかということをお話をしようと思っています。

市街地と周辺農村との土地利用の整合化①

➤中心市街地空洞化と郊外化・市街地拡大が同時進行
(市街地拡大が都市活動の活発化の結果ではなく、周辺農村部のプル要因に基づいている)

➤次のような対応の方向が考えられる。

- ①「非線引き都市計画・白地地域」を「線引き都市計画・市街地調整区域」にする(山形県鶴岡市)。
- ②「非線引き都市計画・白地地域」を「特定用途制限地域」の運用によって「第二の用途地区」を運用する(秋田県横手市)
- ③国土利用調整計画による独自の土地利用制度の運用(長野県安曇野市、福島県三春町)
- ④「都市及び農村計画法」を実現し、一体的土地利用のルールを設ける。

今のところは、それに向けた動きが、ここにいくつか用意しましたがけれども、農村地域でも一定の土地利用ルールを確立するという意味では、鶴岡市が線引き都市計画に、非線引きから変えました。

先ほどの高松の例は、香川県は、全国で唯一線引き都市計画を非線引きに変えてしまった県です。そのことによって混乱が起きています。

高松市はああいう方向性を示しているけれども、現実には都市計画制度が後押しをすることができません。丸亀市という西の方にある市の近くにも、大型店がどんどん進出してきてしまいました。

そんなことで考えると、東北地方では鶴岡あるいは横手というところが、非線引きの白地地域を第二の用途地区とも言えるような特定用途制限を全部かけてしまいました。これは私が今年の3月に報告書を作りましたけれども、白地地域を、特定用途制限地域を運用することで農村地域を守ろうという、こういう方向を打ち出しています。あるいは長野県の安曇野、福島県の三春、ここでもそういう土地利用制度を今考えています。

ここで一番言いたいのは、究極の目標は、私の将来の願いは、都市及び農村計画法一体的な制度を作ることが目標です。すでにイギリスが実現している制度です。日本では都市計画法はありますけれども、農村計画法はいまだにありません。このところをどうやって統一するかというのが大きな課題かなと思います。

市街地と周辺農村との土地利用の整合化②

➤都市及び農村の土地利用を一体的・整合的に運用していく方法を検討する際に有力なのは次の方法である。

- ・エコロジカル・インフラストラクチャを都市計画や国土利用計画などに明確に位置づけること。
- ・もっとも有力なのは河川による流域圏土地利用計画(現状は河川と都市計画、農村計画の連携が不十分)
- ・「緑の基本計画」を「緑と水の基本計画」にするだけで水循環を視野に入れた緑の計画に移行できるはず。
- ・「都市生態学」のような分野を学際領域として充実させていく。地下水の挙動を含めて、GISによるエコロジカル・インフラストラクチャの解析技術を確立する。

(12) 広域公共交通システムの再構築

先ほど高松の公共交通の話が出てきましたけれども、今日本で一番やらないといけない究極の課題はここです。

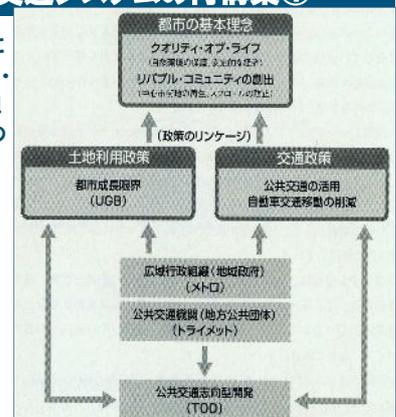
要するに日本の都市計画は、実はですね、交通政策と土地利用政策が連動して成り立っていませんでした。車社会のせいです。土地開発が先行して後から追っかけて道路をつくり、鉄道はなんと廃線になったり、営業不振に陥る。

なぜかという、それが連携していなかったからです。

今本当に重要なことは、都市計画において土地利用政策と交通政策をいかに連携させるか、これはこのポートランドがすでに実現し、日本で言うと、もう皆さんせんごくご承知と思いますが、富山市が我が国におけるこの先行事例として動き始めている。富山市の都市計画はこの二つをリンケージをさせようということ動いているわけです。

広域公共交通システムの再構築①

- 広域交通ネットワークにおける鉄道・道路・港湾・空港の連携と役割分担
- 交通政策と土地政策の連携(例:Portland)



栃木県の宇都宮市が今そういうことを必死になって追い求めています。そんなことが日本でも徐々に出てきました。先ほどの喜多方のバス路線図を見て瞬間的に思いました。要は鉄道路線とバス路線が並行して走っている。これは

お互いに食いつぶしです。どちらも多分営業不振に陥ります。鉄道とバス路線というのはどう役割分担するか、このことによって結節点機能が生きてきます。

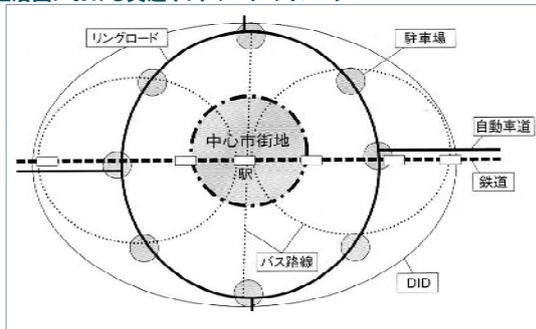
それが今、北上の場合には、実際に僕は現地見てないのにこんな大胆な結論を下すのは失礼かと思えますけど、鉄道とバス、あるいはそこから徒歩圏、自転車、こういうものをいかに連携させるか、というネットワークづくりが重要です。

そのイメージがあります。僕が考えているイメージはこんなもんです。要するに中心市街地に車を貫通させないで、ヨーロッパなんかでよくあるリングロードを作る、それで車をこうやってぐるぐるまわして、こういうところにパークアンドライドのところを作って、これがバス路線だと思えますけれども、バス路線をこんな風にまわす。鉄道がこんな風に走っている。こういうような連携プレイができるようなイメージです。

広域公共交通システムの再構築②

▶広域公共交通ネットワークにおける鉄道とバスとの連携と役割分担

▶生活圏における交通ネットワークのイメージ



(13) 循環型地域経済システムの構築

あと、地方都市で僕はあちこち行っていますが、このコンパクトシティのモデルは、一番重要なのは、経済システムを地域循環型にすることです。

循環型地域経済システムの構築

▶市街地と周辺農山漁村との経済的連携

(農商工連携)

- 地方都市中心市街地活性化効果
- 周辺農山村漁村再生効果(土地利用安定化効果)
- フードマイレージ、ウッドマイレージ効果、
- トレーサビリティ効果

▶地域循環型住まいづくり

- 住宅需要と資源、人材、資金のマッチング

このことが一番重要で、市街地と周辺の農山漁村との経済的な連携、最近では農商工連携なんて言いますが、このことが最も重要だと思っています。

住まいづくりもそうです。住まいづくりも地元の大工さん、工務店さん、設計事務所、それから資源、そういうものがちゃんと地域でまわっていく、ということを考えるというのがコンパクトシティの大きな課題です。

(14) 低炭素社会への貢献

最後に挙げられましたのが、低炭素型社会への貢献になります。

低炭素型社会への貢献

▶コンパクトシティによるCO₂排出削減効果のシミュレーション

- ・交通移動量(とくに自家用車)の削減効果
- ・インフラ整備や郊外開発の抑制効果
- ・中心市街地の複合的土地利用や新たな街なか居住の推進による郊外化抑制効果、インフラ稼働率向上効果
- ・エコロジカルインフラストラクチャーの重視や舗装道路の改善などによるヒートアイランド緩和効果(局地的気象現象の緩和効果など)や公共下水道や河川の負担軽減効果(流量の激変緩和効果)

もちろんコンパクトシティは、CO₂排出削減効果を持っているはずですが、まだ私は数量的にやっていませんが、僕のところの同僚たちがそういうことをできるノウハウをたくさん持っているので、これからそういうことを考えていこうかなと思っています。

そのためにもエコロジカルなインフラストラクチャーといわれるもの、河川とか森林だとか公園だとか、そういうもの、もうちょっとと言うと地下水ですね、地下水をきちっと土地利用の原点に据えるということです。



(15) 結びにかえて

あちこちで私が話をする時に必ずこれを引用していますが、まず私たちに必要な気概みたいなこと、要するに心意気のようなものが、必要だろうと思って、紀元前のアテネの言葉をよく引用しています。

紀元前の都市国家アテネで市民になる時の誓約書にこんなことがあったんだそうです。

「私たちは、この都市を、私たちが引き継いだ時よりも、損なうことなく、より偉大に、より良く、そしてより美しくして、次世代に残します」これが紀元前の都市国家であったんですね。今私たちはこんな気概は全くありません、残念ながら。

結びにかえて

私たちは、この都市を、
私たちが引き継いだ時よりも、
損なうことなく、より偉大に、より良く、
そしてより美しくして、次世代に残します

—古代ギリシャのアテネ人が新たに市民になる際の誓約—
(リチャード・ロジャース+フィリップ・グムチジャン著
「都市—この小さな惑星の」より)

次の世代に何を私たちはつないでいくのか、冒頭に言いましたけれども、私たちは今見失っています。

その所を今解き合すことが、一つの論点としてコンパクトシティだ、ということをつけ加えて私の話を終えさせていただきます。

3. あじさい型都市に必要な

ホンモノの協働とは

北原 啓司 氏

(弘前大学教育学部 教授)

(1) はじめに

先ほど、北上ではあじさい型、つまり中心が1つあって花びらがあるというのではなく、群として成っている都市の構成という考え方をつくったということです。

では、中心市街地がないではないかという話が出たときに、前の議論ではいや、中心市街地は幹である、本当の中心は土から栄養分と水分をちゃんと補給しなければならない、幹がないと1つ1つが成り立たないので、幹だろうという話を以前のシンポジウムでさせていただきました。

1つ1つがそれぞれの存在感を得ながらかつ連携していくという意味で、それをコンパクトシティとどう重ねるかということで、北上市民の方々も言っていることがよくわからないということで懐疑的な方もいらっしゃるお聞きしています。

そういうこともあったので、今日はあじさい型集約都市がコンパクトシティという話とどうつながるのかを私なりに少し考えてシナリオをつくりました。

(2) なぜ「あじさい型」がコンパクトシティ!?

ある先生がコンパクトシティをこう定義しています。「縮退都市」。縮んで退いていくことを都市の計画のコンセプトに持つこと自体が非常に懐疑的に思えます。山形県庁は都市計画課が会議の中で、我々のこれからの戦略は「スマート・シュリンク (賢い縮退)」であるといいました。

賢かろうが賢くなかろうが縮退は縮退です。シュリンクするというのは、縮んで震え上がるという意味があります。どうして都市が縮んで震え上がらなければならないのか。こういった英語をつけるから一般の方々が「なぜ縮まなければならないのか」という風に考えます。

実際に、コンパクトシティという言葉が先行してしまうとますますよくわからなくなります。

スマートという英語を使った都市計画は

1990年代のアメリカが出した成長管理政策、そこでは「Smart Growth」という英語だったんです。Growthとは拡大、成長です。スマートに太っていくという意味合いはわかります、しかし、スマートに縮んでいくという意味合いはちょっと違います。

都市はあくまでも成長していかなければなりません。しかし、その成長の仕方があまりにも不思議な成長の仕方を我々は70年代までしてきたわけです。その反省を込めて賢く成長しようという言い方をしたのが、何をどう間違ったのかコンパクトシティの説明に国土交通省までシュリンクシティ、縮むと言いはじめました。

これは市民には絶対通用しません。なぜなら、今さら形を縮めることは不可能です。一方でこの10年の間に都市は合併をしています。北上だってそうですし、コンパクトシティを進めている富山市も30万都市が45万に大きくなっているわけです。

そういう時代に皆が納得するこの意味をどういう風に伝えながら、今出そうとしているあじさい型とを市民に理解してもらおうかというところは北上の課題です。

(3) EC「都市環境に関する緑書」1990年

鈴木先生がおっしゃったように、ECが最初に出した言葉こそが本当のコンパクトシティを考えていくときにいくつかの切り札があります。

ECが出した緑書、緑書というのは、我々が言っている青信号というのが英語表現ではブルーではグリーンで、緑とは「進め」です。白書は今年1年どうだったかをしっかりと、日本でも厚生白書などを出します。緑書はある提言をしてそれを政策や制度に生かすための前向きな提言を集めたものを、緑書と言います。

その緑書にはこのようなことが書かれています。

- ①都市の環境汚染を防ぐ
- ②緑地での新規開発を抑える
- ③歴史的文化財を保全する

※ストックを活用して保全していかなければならない。ただ残すだけでなく、しっかり保全しなさい。保存と保全とは違います。

- ④都市の再生、持続的な経済開発を進める

この4つがスパッと書かれてあります。この4つをしっかりと読むと、実はヨーロッパのスタンスが非常に難しい矛盾をはらむスタンスがあることがわかります。

というのは、新規開発はするな、環境汚染を防げと書いてありますが、結局は都市の持続的経済発展、つまり結局、長く続けばいいではなくて、しっかりこれから続いていくどこか開発を続けていかなければならない、一方で開発を抑えろということです。

これを短絡的な都市計画を、つまり大きくなればいいと考えてきた、先ほど、鈴木先生が前はどんどん、まちの中に何もないと外に広がっていった、しかし今はまちにいっぱい空き地があるのにまだ広がろうとしている、と。持続的な経済開発を進めなさいと言いながら、新規開発を抑えろということは、これをちゃんと真面目に読めば、開発すべきは土地の拡大ではなく、質を高めていく開発、つまり発展であるということをおぼろげにわかればなりません。

緑書で出したヨーロッパの形が、わたしたち本気で考えていく、今の発展というのは、パイを大きくしてその分の収益を上げていくという市場経済ではなく、価値を高めていく意味でのデベロップメントであるということをおぼろげに考えなければならぬ時代に入っていると思います。

これがコンパクトシティの本来の姿であろうと思います。そのことによって、LRTのような新しい、エネルギー効率の高いものをつくるべきであるということをおぼろげに19年、20年前のヨーロッパはちゃんと言っていたという事実を、僕ら日本は反省しなければなりません。バブルがはじけてしまってどうしようと言っていた時代に、実はこの先を考えていたというわけです。

私たちは持続可能、サステナビリティという言葉をよく聞くわけですが。私たちはもっと真面目に使わなければならぬと思います。サステナブルというのは長く続けばいいというものではありません。鈴木先生がおっしゃったように、サステナブルというのは続けるというのではなく、持続的な経済開発です。ECで最初に出てきた言葉は、サステナブル

ディベロップメントです。この時代にデベロップメントを続けるというのは、開発とは違うということです。

「より偉大に、より良く、より美しく」、まさに「より」が大事で、持続可能に入れていくためには残すのではなく育てていかなければなりません。そのことをまず言いたいのです。

(4) EC「サステナブルシティ・レポート」 1996年

ECが1996年に出した「サステナブルシティ・レポート」のなかで、持続可能な開発の原則4つが書かれてあります。

- ①urban management 都市マネジメント
- ②comprehensive policy 包括的政策
- ③eco system エコシステム
- ④partnership 協働と連携

この4つが持続可能、サステナブルディベロップメントを支えていく大きな考え方だろうと思います。

今日はurban management と partnership についてお話したいと思います。

comprehensive policy というのは、まさに都市計画みたいなものは、福祉、教育、生活もすべて関わってくるものですから包括的にしなければならいでしょうし、eco system、地球環境も今の時代、切り離せないです。これらは皆さん、理解しやすいと思います。Partnership は誤解しやすいと思います。

(5) 都市マネジメントとは

urban management が一番やっかいで、鈴木先生のお話の中でもエリアマネジメント、プロパティマネジメント等のマネジメントという言葉が出てきました。urban management は都市のマネジメントで、マネジメントという意味合いを私たちはちゃんと上手に理解していかないとイケません。そうでないと、プロパティマネジメントも日本で広がっていかないだろうと思います。

僕たちは、マネジメントに対して夢を描けるような日本語で訳さなければならいと思います。つまり、「まち育ての発想」というのは、マネジメントという言葉をおたしは「まち育ての発想」というように訳そうとしています。

なぜなら、manage to~という英語は、なん

とかする・どうにかするという意味であって、普通、マネジメントというと、経費削減、時間節約、うまく管理していくというような管理運営のことばかり考えますが、元々の意味はどうにかする、なんとかして工夫するという意味です。

なぜ、なんとかしようとするかということ育てたいからです。

そういう意味からいうと、ライフスタイルが変化していく中でこの地域を育てていく、育てていくというのはライフスタイルの変化を誘導していくために我々はマネジメントしていく、このマネジメントという言葉は親が子供のマネジメントをする、芸能マネージャーがタレントをマネジメントする、部活で女子高生が野球チームのマネージャーをやる、管理運営ではなく、ちゃんと助けて育てていって、一番いい特性を伸ばし、最も悪い特性を早く直してあげるという発想が都市計画にも必要です。

まちづくりというのは、こういったことはともかくとしてつくろうとしてきた。

しかし、ストックの時代は、できてきたストックをどうにかよくして使っていこうということです。

ですから、ストックを使えばいいというのではなく、ストックをどうやってうまく使っていくかというためにはマネジメントの発想で、悪いところを早くもとから絶って、いいところをうまく伸ばしていこうとする、だからそれはまちづくりというよりまち育てであろう、まち残しでもなくまち育てであろうということです。

マネジメントに育てるという意味を付けた我々はおもって夢を持てるような気がします。そしてライフスタイルが変わっていけばいい、コンパクトシティは形がコンパクトな都市という意味ではない、我々のライフスタイルをコンパクトにする、しかもコンパクトにするということが結局は、我々が最近よく考えるQOLを高めていくということ、スタイルをコンパクトにするということは、密度を濃くしていくということです。

ですから、形を小さくしなければならいとか、合併して大きくなったからコンパクトシティにはならいとか言われますが、そのまちがコンパクトシティを目指していいのです。

私は以前、福島県いわき市でコンパクトシティの授業をしました。その当時は日本で一番大きなまちです。あの大きなところでコンパクトシティを話していいのだろうかと言われて、私は市役所にいいんじゃないと言われて少しお話ししました。言っている意味は理解していただきました。まちの大きさではない、コンパクトな、QOLを高めていくという話をそのためになんとかしていくわけです。

(6) 身の丈の街なか居住、こじつけの街なか居住

弘前で街なか居住というかたちの形態があります。

駅前には区画整備されており、私が引っ越してきたときには何もなかった所です。向こう側に駅があって、ここ10年の間に様々なものができました。まず、広島ของบริษัทによってマンションがつくられ、東北初の借り上げ公営住宅、青森の新町通りにあった西武系のデパートがつぶれてしまったところにマンションができました。全て同じ広島会社が建てたものです。このマンションができたとき、知り合いが言いました。「このマンションができる前はデパートがあった。近くにはスーパーもあったんだけど、スーパーもなくなった。デパートの跡地にマンションが建ったら、どこで買い物したらいいんでしょうね。」「本当だよ。前より不便になったんだよ。」

こういう空間は行くんですけど、本当にこれはコンパクトシティが望んでいたまちなか居住なのでしょうか。

街なか居住とはこのようにしてただただ居住空間がやみくもに増えていくことを指したんだろうか。しかも、その空間のお金は全て広島に流れます。

まちなか居住というのをいいことに、東北の都市を香川や広島会社が上手に使っているだけでないか。それで2年ぐらい前のある雑誌で、「こじつけの街なか居住」という文章を書きました。まちなか居住という言葉にかこつけて、われわれが思うのと全く違うまちができています。

しかし、これに文句だけ言ってもだめだと思います。地方都市はこのこじつけの街なか居住に対抗する地域ならではまちなか居住のスタ

イルを考え、ひねり出していく必要があるわけです。

それが弘前ではとりあえず進めてきているからです。まだうまくは行っていません。弘前はああいうようなものを呼ぶぐらいだったら、自分達が商店街に戻ってきて、2階3階に自分達が住んで、お店を続けていくかたちでリニューアルしようと商店街活性化を今から10年前ぐらいからやりました。

私たちも「このまちに住みませんか」という勉強会をしながら、彼らがやりたかったことは雪の時でも、こういった空間を確保して、歩いてもらえれば助かる、現代のこみせ文化を作ろうという形態からきたんですけど、「ちょっと待った、この空間だけ作って、2m50cmセットバックした商店街をつくって、この商店街は元気になるのでしょうか」と私が持って行き、皆に別のことを考えてもらいました。「あなたたちはどこに住んでいるのですか」と聞いたら、ほとんどの人が外の住宅地に住んでいました。お父さんの時代はここに住んでいました。

しかし、自分がお父さんの手伝いをし始めた段階でお父さんとお母さんはここに住み、若者は郊外に住みます。お父さんお母さんが引退したとき、若者たちはここに戻ってきません。郊外に1戸建て住宅を持っているので、朝10時に出勤し、夕方18時に戻ってきます。ですからシャッターを20時21時まで開けておいてくれと言われても、帰るので18時に閉めてしまうわけです。それが一番の問題だとわかった彼らは戻ろうとしたわけです。

戻るんだったら、自分達が戻るだけでなく、居住空間をここに提案していこうと、するところのまちは住みやすいところだということをしてPRしていかなければならない、自分がモニターとして住んでみて、おもしろくしていけば、他の例えば、学生も住んでくれるだろうという感じで空間提案を始めながら、勉強会をしています。

そのなかで生まれてきたのが、先ほどの東北初の借り上げ公営住宅です。

おたけの瀬戸物屋さんが最初に作ろうとしたのが、高齢者専用住宅でした。しかし彼は考えました。高齢者にいっぱい入ってもらっても若者に入ってもらって、なおかつ自分の母校の小学校が統廃合の憂き目にあったので、何とか学校を存続させたい。若い子が来なきゃいけ

ない。そうすると、高齢者専用住宅ではなく、普通の市営住宅に入ってもらって、なおかつその市営住宅に入った子どもが自分の母校に行ってくれて、若夫婦が入って、自分の店に夫婦茶碗を買いにくる、そういう考えを持ちました。

ですから、最初はデイサービスセンターを入れようかと考えていたのですが、今の時代、希望者はたくさん来ます、しかし高齢者施設は入れませんでした。半年ぐらい遅れましたが、借り上げ公営住宅にしました。

この公営住宅は満員で、入った人にアンケート調査をしたところ、皆、「しばらくここにいてもいいと思う」という答えで、おもしろかったのは、ここに入った契機で、2割ぐらいの人が車を売った、使わないようにしたというコンパクトシティの楽しみ方のような方もいたりします。こういったものはいくら建てても5階6階が限度です。弘前市民はここに13階建てを建てようとは考えません。今までは容積率を余らすことはすごく損な話でした。

この時代になって無駄をして、と言われました。しかし、今は自分たちの身の丈で容積率をうまく使いながらその空間で岩木山を眺望できるという権利をちゃんと確保するわけです。眺望権です。ですから、大きなものは自分たちでは絶対建てません。売ろうとしているのではなく、貸すからです。市は公営住宅ができる前に意味のないオブジェをつくって叩かれました。歩行者専用道路にオブジェをいっぱいつくって、公営住宅ができてやっと日の目を見ることになりました。

私が以前、大学院の事業で連れて行って通った時には、水遊びしている子どもがいました。あそこに住んでいる男の子がまちのど真ん中で水遊びしている、こういう空間がまちの中心にでき、まちもちょっと変わってきました。だんだん皆つられてきます。

お店ができましたが、高さを見れば誰が建てたのかわかります。こみせをつくります。こういうものを見ていると、隣のまちにも「ああいいうのもアリなんだ」と移ります。

それから、違う中心商店街には最近、アパートができました。1階は女性達が行くようなお店があります。3階建てで賃貸です。弘前では、今まで街なかで賃貸アパートはほとんど考えて

きませんでした。しかし変わってきました。広島のマンスションの人たちがいなくなってしまうと、お年寄りが亡くなった後どうするんだろうと、ぞっとするようなことを考え、これくらいの高さで、ずっとずっとこのクオリティを継続させていこうという発想をしました。このようなかたちが流行ってきています。

これを「身の丈の街なか居住」という言い方をします。

地方都市は「こじつけの街なか居住」ではなく、「身の丈の街なか居住」、このくらいの高さで、十分ペイできる、大儲けも全然できない、さっき、ハイリスクハイリターンというお話がありました。東北初の借り上げ公営住宅をつくった「おおたけ」という瀬戸物屋さんに、うちの学生が質問に行き、「おおたけさんが目指すものは何ですか」と聞いたら「ローリスクローリターン」と言いました。ハイリスクハイリターンの時代から、リスクを弱くしながらも、儲けはしなくていい、ローリターンでいい。そういう時代が変わってきたのなら。当然建物の高さも変わってきます。そういう発想の人たちがいる限りは弘前はおもしろいなと思っています。

つまり、ライフスタイルの変化を誘導するということは、郊外に拡散した薄いライフスタイルだけではなく、街なかの魅力を満喫する濃いライフスタイルも選択できる都市であるということです。

否定ではなく、成長して大きくなるというのではなく、QOLを高めるということ。リンゴが熟していくということです。リンゴは大きくなって、それ以上は大きくなれない代わりに蜜が入ってどんどん甘くなります。それがスカスカになって空洞化するのではなく、甘く熟していく。成熟都市という言い方であれば、縮退というよりはよほど意味あると思います。

(7) 合併した都市でもコンパクト！

富山県に呼ばれて、富山市民が何で大きい都市なのにコンパクトシティなんだと文句を言っているということだったので、このように説明しました。

コンパクトシティとは都市が縮むと思っているでしょう。富山は絶対無理です。この都市は濃くなってそのうち動き始めるんだ、都市が熟

して元気になると説明しました。

富山市は合併して45万都市になりました。合併するとどこを中心にしようかとなります。1個1個のまちでどれだけQOLを高められるかという話とせっかく一緒のまちになったんだから、今までは隣町だったから知らなかったものを、どうやって連携のネットワークを高められるか、まさに多核連携の話がありましたが、それを一つのまちでどうやって実現させていくかがコンパクトシティであるということです。

ですから、コンパクトシティとは地方都市で考える場合、1個のまちでコンパクトシティで表現するということはめったになく、1個1個のまちが「俺が中心だ俺が中心だ」などと言い合うことなく、うまくやっていけるような連携型である。

連携型をよく見てみると、やはりあじさい型になるだろうと思います。ですから、1個1個の花を考えていくときにそれは合併した都市と同じ発想であって、16地区がそれぞれ自分達のQOLを高めるためのコンパクトシティ戦略というものをどうやって結び付けていくかを北上で考えていくときの言葉としてのあじさい型であって、結局は縮めようというのではなく、広がったこのかたちでもコンパクトシティだといえる根拠がさきほどの富山の説明にあります。

(8) 協働と連携

「partnership 協働と連携」ですが、パートナーシップとは仲良くやっという話ではないということを一昨日、アイーナで話してきました。みんな仲良くやっいきましょう。そもそもみんな同じことを考えているとは思わない方がいいです。同じことを考えていることと会った方がめっけものですよという話です。

様々な主体はそれぞれのミッションみんな違うわけですよ。個々のミッションを意識しながら、同じ方向のゴールを目指して活動を進めていくこと。まったく同じゴールではなく、同じ方向にありそうなゴールを目指して、皆、別々の主体を持っているということをおぼえてはいけないだろう、それぞれの立場や役割を自覚しながら、自らのミッションの遂行に向かって努力を続けていくことだろうと思います。

協働すること自体が互いの弱みや苦手な部分を補って余りあるアドバンテージとなる。連携

というのは言葉ではみんな分かっていますが、本当に上手に連携している事例はそんなにないと思います。

そのために連携のワークショップがあつて、この前お話をさせていただいたんですけれど、何とか両方がうまくいこうではなく、自分達が自分達のミッションをどうやって自分達で意識しながら、「こんな考えの人もいるんだ」「こんなことをやっているまちがあるんだ」というようなことを生かしながら、自分達のいいところ取りをしていくような発想で、そうです、私たちはいいところ取りをしているんですと強気で言うていくこと自体が、私は連携や協働の基本だと思います。

皆さんのためを考えて、譲歩してこうやります、みたいなことを言うくらいだったら、申し訳ないけれど、私たちはこういうところを取りますという話をしながらやっっていく連携だから、僕は信用できるんだと思います。

(9) 役割の分担とは

役割の分担とは、立場の異なる主体が関わる場面です。しかし、我々は立場の主体が関わる時は、ここまでは自分のテリトリーだけど、そこからは手を出しませんというように、自分の領域がどこまでかが気になってしまいます。

ですから、自分はここまでやるという、まちが連携するときが一番わかりやすいのが境界線ですが、活動対象と非活動対象を線引きしてしまいます。この活動対象は、我々がそこまでやっても誰にも文句言われまいだろうという公共性です。

この公共性の論理を支えてきたものが、先ほどの鈴木先生の講演にもありましたが今までの公共性を担ってきた最大の要因は多数決の原理です。

しかし、わたしは鈴木先生よりも一回り若いんですから、数学論、積分的世界という話をします。積分世界は多数決の原理です。多数決の原理をもういっぺん捉え直してみようという話を僕はここでします。

(10) 積分的世界

積分は2次元では面積で、3次元では体積である、しかし、この積分にはらんでいる問題は、このエリアに入っていることが大事であつて、

多数決もこのエリアに入っているものが対象で、エリアに入っていないものは同じものを持っていても相手にされません。積分は非常に厳しい論理であって。エリアの中に入っていることが大事であって、外に出てしまうと対象外になってしまうわけです。

僕はこれを見た瞬間に、これまでのまちづくりってそうじゃん、この線からからこっちはとということで決まってしまう。線の中に入ることに対してみんな一生懸命頑張る、入れてもらって補助金をもらう、みんな一緒にやってしまう、そこに入ってそうになってしまうこと、つまりそのときにこの色もあるとあったとしても少数意見になる。結局、この地域はこの色でいこうというように変わってしまうわけです。

前の色が赤だったことは忘れてしまって、違う色になる。多数決が持っている怖さ、違う色があったという存在をだれかが覚えておくんだろうか、この話を我々の大学の数学の先生に話しました。すると、「素人にしてはなかなかいいセンスをしている。積分というのは、誤差の平均の最小化である」ということです。誤差の平均を最小化するという事は、誤差がないほうがいいんだという気がしてきます。

つまり、いろんな意見がばらついているときに、その誤差を平均していった方がいい、最小化していくということは究極のリミットをゼロにもっていくということです。

そう考えていくと、積分的世界というのは1つの個は公共性を帯びにくく、線形の中に埋没します。

奥田道大という人が「中間層的観念の支配」と言われた、住民参加は中間層的観念の支配であって、半分は信用できない、なぜなら同じような階層、同じようなことを考えている人たちをよしとするような考え方ではないか、つまり、いろいろな考え方を2次元に分布したときに、そこに係数を計算しようとする、必ずどんな分布でも線が入ってきます。

誤差の平均を最小化する話からいくと、この線の近辺の人達を意識しておけば、7割8割のマルがもらえるわけです。線から遠い人は想定内の異端児です。ですから、この人たちが反対したとしても、最初から計算づくです。

奥田さんが住民参加について、住民参加というのはややもするとこの線中心に走ってしま

う。アメリカ型のワークショップでは線から遠い人たちにある種の市民権を与えます。もしかしたら、この人の意見にみんな引っ張られて行きます。

しかし、我々がやってきた民主主義、多数決の積分世界は差がないことが一番の理想ですから、この線から離れないようにみんな頑張ります。この世界で見えていくと、一つ一つの市民活動や、その他大勢の活動が中心になっていくという話には僕は限界があると思います。

今、本当に必要な公共性は僕は線から遠い人にしっかりと公共性を反映させるようなものであろうと思います。

(11) 新しい「公共」とは

公というのは決して我々が考えているものではありません。溝口雄三著の「一語の辞典 公私」という本には、「公は平分なり、ハムに従う。ハは猶背くなり。韓非曰く、ムに背くを公と為す。」とあります。

公と私は対立するものとして捉えてきているけれど、実は同じムという字が入っています。ムに背くとありますが、普通、背くというと裏切ることととらえますが、そうではない。ムは自分自身を指します。自分を背くということはつまり、外に開くということです。外に開くためには両手を広げます。ハは両手を広げている図で、個人が両手を広げている図が「公」です。もし、この解釈が本当だとすれば、僕はとんでもないことだと思いました。

つまり、公共の公という字が個人が両手を広げた図であるということは、一人で始まります。

我々は数の論理で、公共性をうむためには多数決で8割の人が賛成していますから、あるいは行政が決めたことですからと公共性とはそういうものだと思っていましたが、もともとの中国の語源から言うと、たった一人の個人が「公」の性を帯びることができるわけです。個人がムに背いたときです。自分のことではなく、外に目を向けて自分を開いた瞬間を「公」と言ったという話です。

それを日本は全く違う解釈をしたわけです。Publicもそうです。ヨーロッパの市民は開かれた市民です。ということは公と私は対立語ではないです。ということは新しい公共、新たな公という存在を我々はどう考えていくかです。

一個人、一つのグループが開かれた存在として地域である種の活動を始めていくこと、それを公と見なす相手の立場がいて、その人たちにまた新しい人が連動していきながら、個人がそれぞれの想いを深めていく、そういうことを地域の中で濃く濃くしていくことをまさにコンパクトシティになっていくわけです。日本は「公」を「おおやけ・きみ」と言ってしまうからまずいわけで、おおやけというのは、王と屯倉です。きみとは天皇陛下です。

「公」の言葉がそういう意味を持っていたということ、もともとの意味が全くつながっていないという事実を知って少し僕はほっとしました。そうか、Publicとはそういう意味だったんだということですよ。

もっとすごいのは、中国では「公」の共同体は、民の「私」や「欲」の集積であるということです。私利私欲とあって、我々は自分を外に出すなといわれているわけですが、「公」の原則、中心に個人の欲があります。商店街に行ったときに僕は言います。あなたのやっている下駄屋さんを孫に継がせたいという欲でいいんです。

商店街のアーケードをつくって、歩行者量を多くしようというのではなくて、あなたの息子が自分の店を継いでくれるかという話が一番のあなたの命題でしょう。

そのことを考えていって、あいつは自分の店のことばかり考えているという言い方はやめましょう。その人たちが輝いていないと「公」は「公」ではありません。

つまり、微分的な考え方という話になっていくわけです。どういうことかという、微分は素晴らしい数学です。なぜなら、1個1個の傾きが違い、微分はこの傾きを指します。皆、違う傾きを持っているということを知りながら1本の線をつないでいくという素晴らしい美学があるわけです。

積分では全部まとめて、多少の違いがあっても面積の中に放り込んでしまうという発想でしたが、微分が素晴らしいのはそれぞれの傾きが違うというわかりきったことをいうわけです。

しかし、1本でつながっている。数学者はこう言いました。「微分は誤差の平均の最大化である」つまり、誤差があるということをどんどん外にアピールする数学です。

僕はこの数学が好きです。誤差の平均を最大

化するという考え方をまちづくりに生かしていった方が、つまり、ちょっと変わったことをいう人がいるんだけど、その人が言うことをもっともっと本気で考えていったらけっこうわかることがあるとやっていくまちづくりの方が、本当の意味での民主主義だと思います。

(12) まちを育てる新たな公共性

—津軽に息づく微分的空間—

黒石のこみせ、これこそ微分的空間です。自分の庭、自分の空間を歩いてくださいとつないでしまつて、我々は歩きます。これこそが微分です。都市型の道路は積分の道路です。こみせは個人の敷地で、それを歩かせてもらって道路になっています。

こういう発想こそがコンパクトシティの技術論として出てくる、うちの中心市街地には空間がないという話をしているときに、まだまだ使える「民」の土地がある。民の土地が公共されるというのはこういうことをいう、いくらでも自分達の土地を再編集できますよといえます。

全くプライベートな空間で、売り場空間、ドアや窓ガラスが付いていても道路です。黒石ではここから土地の税金を取っていません。免税しているからこそ、このまちづくりが育っています。たばこの自動販売機もはみ出さず、自分の敷地内です。

セミ・ファブリックの意味、小見世という言葉は、私が広がって行って世界につながっていくという意味で、よくぞ作った日本の当て字だと思います。パブリックな性格を帯びた空間がまちなかで再編集できる、コンパクトシティは縮めていくのではなく、空間を生み出していくんだという話をします。

しかし、もっとすごいのは黒石の人たちは、自分達のお金で7000万かけて、空間を買い取ろうという人が出てきて、もっとすごいのはコンパクトシティの心髄はまちなかにはもっと使い勝手があるということを知り、再発見して再編集していきます。

まさに、究極のプロパティマネジメントで、我々が都市計画で饅頭(街区)のカワとアンコです。道路がカワです。内部の敷地、街区がアンコです。そこには住宅や商店街が細長く並んでいます。大体の商店街は間口が長くて後ろが余っています。余っているんですが、アンタッ

チャブルで入れません。隣通同士が共同体ならいいですが、そうでないと後ろの空間は死んでいます。死んでいる空間はどここの商店街でもいっぱいあります。こみせは商店街の前の空間です。後ろの空間を何とかしようと思ったら、マネジメントしようとしたら、後ろを取っ払うしかないわけです。みんなで使おうというのはできますが、口だけの話ではできません。しかし、実際にやっているまちがあるということをお話したいです。

黒石はこみせのなかに新しく公園をつくりました。公園という感じは「公」の「園」です。高橋さんの裏庭が公園、「公」の空間になり、「私」が「公」に変わりました。

こういったことをちゃんとやっていくことによって、まちなかに新しい空間が広がっていきます。彼らと一緒にワークショップをした時、「まだまだ我々のまちにはこんなに空き地がある」なんてなると、整備したり、自分達の蔵の中も掃除して空間をつくったりします。だんだんまちなかの QOL が高まっていきます。

越前市も商店街をマネジメントしました。古い商店街と新しい商店街がつながっています。一番びっくりしたのが、商店街の中の店を閉めて、裏に店を開く人がいます。これを中心市街地活性化とっていいのでしょうか。ただし、こちらのほうがやりやすかったと思います。裏の空間、閉めていた空間が表に変わります。そうやって中心市街地を再編集していくと、まだまだ我々のまちは使えるぞということになります。

(13) おわりに

コンパクトシティは市街地の再編集である、市街地に点々と存在する空間があります。空き地、スペース、空間とは空いている間です、空いている間はいっぱいあるけれど、あなたの「場所」にできるか、「私」の想いが「空間」を「公共」の「場所」に変えるということです。あじさい型で最も大事なことは1個のあじさいの単位が「公共」につながって行って、それがスペースをプレイスに変えること、プレイスは、先ほどの鈴木先生の説明でいえば、「自己実現の舞台」だと思います。自分が自己実現の舞台をまちなかで持てるかどうか参加のキーポイントだと思います。

一つ一つのあじさいの花の単位に「場所」を生み出していく地域政策があり、一つ一つの花の連携が紡ぎ出す「あじさい型」コンパクトシティの単位が一つ一つの「私」の想いが伝わっていくスタイルが参加ではないか、そう考えると、あじさいというスタイルをよく出したなど、そういう意味で表現はともかくとして敬意を表したいと思います。コンパクトシティという言い方をするよりは、部分の集積で全体をつかんで行って、しかも部分の中に全体の考えがちゃんと入っているよというのが、北上のコンパクトシティ論として定着していけば、僕は北上はおもしろくなっていくと思います。その時の切り口として、若菜さんがおっしゃっているような公共交通、みんなの交通だというような切り口が必要なのかなと思います。

IV. 今年度の「元気な地域のかたち創造ワークショップ」の取り組みについて いわてNPO-NETサポート 菊池 広人

(1) あじさい型集約型都市のイメージ

様々な色の花が咲く16地区と既存のストックがある中心市街地を結ぶというところで、花として咲きながらしっかりと持続可能な構造をつくっていかうというのが今回の取り組みです。昨年度は、北上はこのかたちがいいのではないかということ昨年度の取り組みの中で考えました。今度は具体的に、それぞれの花を咲かせる取り組みはどのようなものがあるかを検討しているという流れです。そのなかで、私たちが注目をして実際に進めているのが、中心市街地と各地区をつなぐ、各地区同士をつなぐという公共交通の部分に視点を絞って、この事業を進めています。その他、実施するにあたって、例えば、黒岩では地域支え合いの給食サービスをはじめようとか口内での過疎地有償運送での地域支え合いのシステムというのを別個、支援させていただいています。

それから、包括的政策という意味では、今回の事業に関して、都市計画課さん、政策企画課さん、地域づくり課さんと連携しながら総合計画、地域計画、公共交通ビジョン、来年度から始まる都市計画マスタープラン、その他様々な計画とつないでいかうというかたちで情報交換会も今、させていただいています。

(2) 北上市における公共交通の取組み

では、交通の部分で具体的に何をやっているのか、いくつかご紹介をさせていただきます。

まずは中心市街地の交通のほうを今、やっています。まちなか交通点検をやってみて、例えば、バスの乗り場案内がまだ北上病院がついていたり、ほとんど白くなっていて何がなんだかわからないという状況があります。

今、公共交通ビジョンも策定に向かって、様々な情報収集もやっていらっしゃるので、若菜さんや政策企画課さんと一緒に進めさせていただきながらやっています。

エリアの路線図を作成し、バス停に貼っていかうということであったり、平日の北上駅からさくら野までのバスの時刻表になりますが、今までは1個ずつの路線の時刻表があったのです

が、まとめてみると、3分、5分に1本、あるいは同じ時間に走っているというくらいバスの時間が多いというような、既存のストックをどう活用していかうかということに視点が変わり、今、駅前・さくら野近辺のバスのサインやこのような時刻表を作成しながら、今あるものをより生かすための取り組みを社会実験としてさせていただいています。

もう一つは、各地域を支える交通という部分で、過疎地有償運送実現に向けた取り組みをお手伝いさせていただいていますし、乗り合いタクシーの改善も今、しています。

今、和賀地区では乗り合いタクシーをやっているのですが、平均の乗り合い率が2を切っている、つまり1人で走っていることも多いという状況もあり、採算が取れているとは言い難い状況です。

事業者さんが頑張っているという状況をどのように生かしていかうかということで、全地区一緒だった時刻表を各自治公民館単位で時刻表を作成して配布します。

また、もう少し使いやすい時間帯をということで、本数がだいぶ増えたんですが、事業者さんはこれでやろうということで、1月からのスタートに向け、最終調整という状況です。

まずは、私たちは交通という観点で進んでいたのですが、新しいものを生み出すというよりは、今の資源をどのように活用するかという視点で進めている状況です。今年度、来年度の始めまでで様々なあじさい型集約型都市の実現に向けたコンテンツを実際にやってみたり、様々な調査をしながら来年度にかけては、北上のあじさい型集約型都市の実現のためにはどのような方向性があるかを検討させていただきたいと思っています。

いわてNPO-NETサポート 高橋 敏彦

北上市はこれから総合計画をまとめていきまじ、地域計画も8割9割くらい、16地区できていて、調整が残っている段階ということでもあります。そして、北上市では都市計画マスタープランをつくるということになっております。

あじさい型集約型都市の方向に進むためには、地域が元気になるためには、具体的にどんな方法で地域計画、総合計画、都市計画マスター

ランに反映させればいいのかということで、それぞれの地域や皆さんから挙げられた要望の優先順位づけということも今、やっております。

そのためのポイントを伺いながら、1月23日に開催するフォーラムに向かって、今年度の活動のまとめと今後の計画に生かしていく基礎にしたいと思っています。

V. 意見交換

質問 1

鈴木先生の講演の中で、効率性と公正性のバランスが大事だというお話がありましたが、公共交通を考えたときに、市が公共交通の運営をするとなると、公正性のほうにばかり目がいつてしまう気がして、効率性の方になくなるのではないかという気がします。

というのは、公共交通はどの地域でも必要ですから、その声を全部聞くというのは難しいのではないかと思います。

その場合はどうしたらいいのでしょうか。例えば、公共交通をやるのはいいですが、最初から収支率を定めておいて、その収支率に届かなかった地域は公共交通はやめにしましょうというような取り組みも必要なのではないかと感じました。その辺りをどうお考えなのかということが一点です。

また、効率性をもっと唱えると、コンパクトシティになっていきますが、あじさい型コンパクトシティというのは花がたくさんあって、たくさん花を咲かせましょうという百花繚乱的なイメージもあるのですが、例えば、市街地と農村地域も同じ花を咲かせることでいいのか、農村地域に花を咲かせるのだったら、農村地域も市街地と同じくらい補助率を上げてくれという住民の声が聞こえてきそうな気がしますし、北上市の場合、幹がほとんど腐っているような状態ですが、それで花を咲かせることが果たしてできるのだろうか、幹を再生させることがまずは必要なのではないかという気がします。

高橋 敏彦

一つは公共交通を考えたとき、効率性と公正性ということで、使われない所に行政がいくらでもお金を出してやっていいものか、その基準

をどの辺に持っていったらいいのだろうかということと、あじさい型で幹が腐っているという表現がありましたが、それをちゃんと診断してこれからやっていかなければならないと思います。その辺のアドバイスを鈴木さんをお願いします。

回答 1

鈴木 浩 氏

公共交通において効率性は重要だと思います。

今の公共交通はご承知のように、市町村でいろいろな補助金を受け、多分、今のバス路線は採算は成り立っていません。にもかかわらず、空気だけ乗せて走っているバスもたくさんあります。路線に、もっと合理性を追求しなければなりません。

先ほどの若菜さんの話では、30年40年間も同じ路線をそのまま走り続け、それに補助金をやっている。補助金についても今の実績が同じようなレベルか、さらには補助金をやめなければならないという状況になっています。公共性は担保できるかわからないという状況まで今、来ています。

先ほども言いましたが、バス路線というのは鉄道などの役割分担を考えてきたんだろうかというところにメスを入れて、公共性というものを鉄道の持っている役割、バスの持っている役割、そういったものを合理的に考えていくなかで、効率性、公正性の橋渡しができる気がします。

私は、採算性でこれは切ってもいいのではないかというようなお話は、その努力をしない前にその基準を設けることが、私にはイメージできません。どこでそれを設けるのかというと、今の総務省の補助金をかけているものについては、確かにあります。利用率がここまで下がったらもう補助金を出さないよということで、みんな廃線になっています。

その仕組みに対抗しないといけないので、私たちは今までの路線の補助金をそのままに考えることはやめないといけません。その戦略を今つくることで、効率性と公正性をどのようにして新しい戦略に置き換えていくかという段階のようなので、その前に一定の採算性の基準を設けるのではなく、枠組みを考えてから基準を設けるなりした方がいいのかなと思います。段取

りはそういう順番のような気がします。

先ほどの富山の話では、LRTとか駅から半径500mの所に住宅を建設する、その集合住宅に住む、マンションを買うというときに50万円の補助金が出ます。大したことがないといっても、これには富山市のある種の哲学があります。市民の中に長い時間をかけて浸透していくと思います。

もちろん、農村部に家をつくることは都市計画、許されないのですが、富山市は駅の周辺500mのところには家を誘導する取り組み政策をつくっています。

これはたぶん、ここ5年10年で成果が上がるというよりは、50年とか時間をかけて成り立つものなので、今のような、公共交通の戦略性と私は言いましたが、効率性、公正性というのはすぐに明日からこういう枠組みでやったら成果が上がるというようにはなかなか考えにくいのです。

ちょっと時間をかけて、そのときの公共の役割は大きいと思うので、戦略をもう少し変えないとならない、すぐに数字にいくのではなくて、今、大事なことは効率性だと思いますが、そのための戦略はまだ描かれていないわけですから、それをぜひお考えいただきたいと思います。

若菜 千穂氏

効率性と公正性は当然、問題になって、一つ解決策が見えてきているのが、路線バス＝公共という話がずいぶん聞こえてきていますが、路線バス＝公共交通なのか、公共とは一体何なんだろうかという話がいろいろな市町村から出されています。

解決策として見えてきているのが、公共交通を2つに、幹線の部分とそれ以外の部分に分けて、幹線については公共交通として行政のほうで維持する、誰に対しても開かれているのが公共的な空間と思っているので、誰でも乗れる、そして幹線を維持する。

それ以外の部分については便数が1日1、2往復、それは誰でも乗れるのかということもあって、公共性に欠けてくると思うのですが、それは地域の方がどれぐらいの水準を必要とするのか決めなさい、行政は1日最低の生活を維持する水準として、週1日3往復に足りうる費用を、その地域に対しては行政が支払います、として

週何日走らせてもいいし、1日何往復にしてもいい、それは地域で決めなさい、不足する分は地域で補てんしなさいという考え方で運営を始めている所もあります。

おっしゃるように、全てを公平に考える必要はなく、ではどのように考えるかということ、幹線を分けて地域で考えさせるような仕組みを取り入れる時代になってきていると思います。

北原 啓司 氏

効率性のことを考えると、空気を乗せていると、誰が見ても客観的に無駄なことをしているという考えになるのはその通りなのですが、私は弘前市の隣の平川というところで過疎バスの会議に出ていて、先ほどの話で30年、50年先を考えてという話がありましたが、要はバスの回数券をいっぱい買わせることによって、乗る乗らないにかかわらず売り上げが出ます。

それでバスを走らせることができるということがよくやるのですが、バスに乗らなければならない人というのは車がない交通弱者の方々で、その人たちにお金を払わせるのではなく、40、50代の人たちに「いずれ乗れなくなるのですよ、そのときに今、せっかくまちがやっている100円バスの仕組みが破綻してしまうとあなたたちが使いたいときにもうこのバスは走っていませんよ、もしそれがいやだったら、そのときにちゃんとバスに乗れる社会をつくるために、未来への投資だと思って、地域にお金を落とすしていく、投資という発想だと効率では計り知れない部分があるわけです。

しかし、そういう発想でも言わない限りは効率が表に出てきます。そこで回数券を買おうとはならないのですが、あなたたちのときになくなったらどうしますかというかたちで何とかならないだろうかという話をしようとしています。

効率の論理は、時間ということでこれを将来、どうやって残していくかという発想が入ってこないと思いません。

それから、あじさい型というのは花をいっぱい咲かせようというのではないと思います。中心性というのを考えたときに、1つ本当の中心があって、周りにサブがあっというろんなことをやっているのではなく、口内も大事だし、和賀も大事だし、更木も大事というように、いろいろところが持っている様々な個性は色が違う

んです。

あじさいは全部ピンクや白ではなく、見たときに色の彩度や明度が違います。あじさいは中心があって、回りにサブがくっ付いているという花の構造ではなく、それぞれが主人公であるということを考えていくときに、1個をしっかりと考えていこうということです。

花を咲かせましょうではなく、今、咲いていた花がひどくならないように、水もあげなくてはいけません。これがダメになっても土台にきれいな花があるからいいではなく、1個1個をちゃんと持続できるように考えていきましょうというときに、あじさいは興味あります。百花繚乱的に花をどんどん増やしましょうという話ではないと思います。

ただ、これは象徴的な話で、先ほど、幹がしっかりしていない、腐っているという話がありました。総合計画であじさい型の話をしていると、中心市街地活性化しなくていいのかという話をする人がいます。

あじさいは中心がないではないか、中心市街地は関係ないのかという話が出ます。しかし、今、おっしゃった「腐っているかもしれない」という言い方が、あじさい型プランの中心市街地活性化に力を入れなければいけない一番の理由なのです。

幹がしっかりしていないと、それぞれのあじさいが輝かない、中心市街地と離れている地区との関係性をどうやって北上が持てるかというときに、1本の幹が元気がなければ、いくらあじさいが輝いていても意味がない。

あじさい型というコンパクトシティの総合計画的プランとして推進しようとするほど、幹としての中心市街地をどう考えるかをちゃんと理解しないと、花が成り立たないということになると思います。

分散している建物を何とかすればいいというのではなく、中心市街地という幹をしっかりと機能を果たすようなかたちで、1個1個の花がしっかりそれぞれをまっとうしてほしい。1個1個咲かせようというのではなく、まっとうできるかたち、そういった意味でのあじさい型だと思います。

あじさい型プランを評価するとすれば、その言い方が一番だと思っています。

高橋 敏彦

あじさい型の幹の話、腐っているように見えるという話でしたが、我々も中心市街地、広瀬川等でまちづくり活動をやっていると一見、駐車場は増えているしシャッターは降りているし、腐りつつあるなあという感じはあるのですが、よくよく見ると古い蔵が残っていたり、蔵の中にはもしかすると大事な雛人形があったりするかもしれない、

それがまちづくり、中心市街地が生き返る材料がまだあるかもしれないので、それは捨てるように、幹を再生させるように見ていきたいなあと思います。

それから、先ほどの交通のことですが、一つは路線に合理性がない部分が結構あるということで、交通インフラも含めて、都市のかたちをよくみんなで評価したことがあまりないのではないかと思います。

今は、交通ビジョンを作ろうということで公共交通を評価しているのですが、できればある一定の場所では住民の皆さんを参加させて、共同評価というものを進めたほうが、今までは行政対地域、行政対路線利用者という個別に対応していたので、どれを基準にして切ったらいいいのかということを考えてしまうんじゃないでしょうか。

ですから、1対1対応ではなく、行政は公にして、そこに市民の皆さんと一緒に参加して評価できるような仕組みができればそれほど行政は苦勞しないでみんなが納得できるような方向性が見出せるのではないかと思います。

例えば、空で走っているバスを見ると、大丈夫なのかと皆さん思うと思うんです。そのときに、バスを走らせるのではなく、タクシーでいいのではないかとか、それもできないようならみんなで努力し合いながら、誰かが運転しようではないかというような別な発想が出てくると思うので、そこに市民の皆さんを参加させるような仕組みをやっていったらいいのではないかと思います。

今、実際に総合計画ではそういったかたちで入っていますし、地域でも入っているので、いろいろな場面で市民を参加させ、一緒に評価していくことが簡単にできるようになればと思っています。

どうもありがとうございました。

質問 2

総合計画のまとめ、都市マス計画、地域計画づくりのなかで優先順位づけが行政が迫られてくると思います。その際のポイントをぜひお伺いしたいと思います。地域計画を16地区で立てました。それが今、北上市に上がってきたところです。それぞれ皆、要望通りにいくわけではなく、予算をつけなければならないので、優先順位をつける必要があります。その時のポイントを行政サイドにアドバイスするという感覚でお願いできればと思います。

回答 2

北原 啓司 氏

地区別や部分別にそれぞれ積み上げていくやり方で一番怖いのは、全部を実現できるのであればそれをくっつけて積み木をつくれればいいのですが、その中で優先順位をつける、誰にとっての優先順位かというとき、自分たちが今まで議論してきたこと、やってきたことが一番最後にどこかで削られてしまったことを感じてしまった市民がその後、どんな気持ちになるかを考えると、それだったらやらないほうがいいという話になってしまう怖さがあると思います。

参加型には、ほんとはそれは幻想であって、やったことが全部できるのであればプロはいらないので、やはりプロはそこは仕分けをしなければならぬのですが、国の仕分けを見ても、仕分けの論理は理路整然とした形ではないので、見ていて違和感があります。

市でやってきている、地域の中から出てきたものを横並びにして、どうやっていくのか、逆にどういうされ方をしようとしているのか、逆に聞きたいです。

つまり、積み上げていくやり方のときに、もし本当にやるんだったら各地区から出てきたときにこうやって北上の地域づくりをやっているときに、大きな柱が何本かあって、その中から言う優先的にはこれというやり方を皆の前でできるのだったら誰も文句言いませんけれど、出てきたものを比べて、こっちのほうが良さそうだと、これは金がかかるねとかやっていくのだったら民主主義でも何でもないと思います。

もし、仕分け関係なくやるにしても部分でやっていったときに、実はモザイク画と一緒に1

個1個の部分を見ていったらすぐわかるんだけど、それを全体と見たときにどういう絵を描こうとしているかという大きなモデルがないままに部分だけ積み上げていくと、それぞれみんな満足して、気がついたらうちのまちがこんなになっちゃったということもあると思います。

都市計画や長期政策というのは、大きくこのまちをこういう方針でこんな風にしていかなきゃという骨太な物語があって、そして、それとは別に個別に市民の人たちの身の丈の要望が出てきて、あるときには身の丈を見ている人たちにちょっと上を見なきゃと教えないといけない部分もあります。

大きな方針として小さなものを積み上げて対抗する論理を市がどう思っているのかという話を聞かないと、私は何とも言えません。

あじさい型でやっていることは、各地区の積み上げ＝総合政策ではないということですが、わたしは逆にしたいと思います。

積み上げてなんぼではなく、積み上げたものに対して答える論理を市がどういう考えをもって、それに対して「だからこそこれにします」と言えるのであれば、それが一番いいと思います。

北上でどのようにまとめようとしているのかは聞いていないのでその辺りの仕分けはすごく難しいし、優先順位をやれそうなこととかからやったのでは、30年後の北上には申し訳ないことをしているという話はしたいと思います。

高橋 敏彦

実は地域計画でいくつかの地域に行ったときに、市は方針を示してくれということは何度も言われていました。そのために、あじさい型のイメージはつくったのだけれど、具体的にはどうということなのかを今度は示してあげないと。

北原 啓司 氏

あじさい型都市というのは方法論として、一つ一つの花が主人公で、一つ一つの花を総合計画でしっかり考えていこうという目線を提示しているだけであって、それは総合計画をつくる方法論ですよ。

そうではなく、総合計画を目指す北上のあるべき姿、農業、自然環境、工業をどうやっていくか、そういう大きな方針が個々の世界の住み

分けて出てこないんですかね。それが大きな方針であって、あじさい型プランは1個1個の花が大事で、それがネットワークでつながるといのが構造上の目標像ですから、その内容について言っていることにはならないと思います。

高橋 敏彦

あじさい型を示したうえで、具体的に意味付けしていかないとならないということだろうと思います。

鈴木 浩 氏

あじさい型集約都市の図を見せていただいて感じているのは何かというと、北上は都市計画をやっておられますが、そのなかで16地区ごとの核をつくっていくとうきにすぐ都市計画の中で思いつくことが、例えば、核になる都市計画の用途地域以外の所に一定集落を与える、もともとの合併前の中心集落がありというようなことをどう生かしていくかがこの図の背景になっているのかなと思います。

そのときに、先ほど紹介した、そういった既存の集落や中心集落になっていた所と、例えば、北上の中心市街地の間に実は、さまざまな軋轢などが生じるのです。

そのときの受け皿に土地利用上のにじり出しの背景になってしまうのが白地地域です。白地地域をどうしようかと考えた結果でもあります。

ということは、白地地域であじさい型の一つ一つのかたまりを見て、地域コミュニティを活性化させるために、ここでは、どういう土地利用をイメージしているのかがわからないと私にはよく見えてきません。

白地地域は相変わらず私が言ったようににじり出します。それは農家の方々の中で後継者がいなかったり、農業自体のてんのうがほとんどなくなってきたりとしているなかで、私の農地を1町分、大型店に貸すと500万以上の賃貸料が入るじゃないか、1町分米を作っても120万、実際に人に入るのが80万60万です。四苦八苦して米を作っても、大型店に貸すと、福島県では国道4号線沿いの優良農地だと貸すと7百数十万です。ここら辺ではどのくらいかわかりませんが、市街地周辺の農家の人たちがそういう土地利用になっている状況です。

市の人たちは農家の人たちがそういった厳し

い状況になっていることをある程度理解してあげないと、「あなたたちが農業をやって、わたしたちがそれを消費するんだ」という仕組みを作らないと、農家の人たちが農業をやろう、そういったインセンティブが全く働かない状況です。

そういうなかで白地地域はつけ狙われてしまう最大の要素なので、もしも、これだけの数のクラスター、中心ができるなかで、中心がどういことを核としてやるのか、白地地域が広がっているなかで白地地域がどういう動きをするのかが都市計画的な課題です。

それから、今、東北地方で、中心市街地が腐りかけている大きな動きが病院です。病院は老朽化したら建て替えなければなりません。ところが、病院が難しいのが、病院という事業を継続しながら建て替えますので、現地建て替えが利かないのです。

同じくらいの敷地を持っているのならできますが、そんな敷地を持っている病院はないので、どこに建て替えるかというみんな郊外です。

秋田県では、JAが医療機関を供給してきました。農村地域ですから。そうすると秋田県の中で致命的な病院、湯沢市、その教訓を学んでなんとか市街地につくったのが横手市です。大曲は真ん中であつた厚生病院が建て替えしようとしています。さて、これをどこにやるかで四苦八苦しています。要するに、中心市街地にあつてしかるべき、周辺の人たちにとって生活に最も必要だと思われる公共公益施設がそういう状況なのです。

ましてこれに追い打ちをかけるのが周辺の大形店、大型店とはいかないまでもマックスバリュ系の5000㎡級の建物、まちづくり三法ができてからもイオングループはだいたいの方に網にかからないような数千㎡のものをつくり、近郊のクラスターになっている所に一致するとその地域は元気になるのですが、実はそこをみんな協議しないとイケません。

そこが元気になるとまちなかの商店街はいかれます。いかれたときに、中小の医院にもお客さんが来なくなると、医院もいかれます。あるいは、もっと言うと、映画館など、もともとにぎわいがあつた、買い物できて、お医者さんにも行ける、というのが実は生き残る目標なのです。

ところが大型店がうちの集落に来ると便利だ

と言って招きますが、それが相乗効果でまちなかの幹の部分腐っていきます。典型的なのが病院、映画館、小さな医院です。中心市街地のもっていた利便性やにぎわいが崩れ落ちていきます。朽ちていきます。

ここをお互いフォローしていかないと、医療施設、大型店、商業施設、学校建築をそれぞれを16地区で、今度おれの所に公共施設を持ってきてくれないかという戦いを今までたくさんしてきました。花巻の宮沢賢治記念館もどこにもっていくかということで、私も仲裁に入りましたが、それでやむなく、あそこの山に持って行きました。そうして公共施設の立地の奪い合いになります。それは全体で調整しなければなりませんし、その危険性を早めに理解しないとイケません。それが地域計画の調整機能だと思います。



若菜 千穂 氏

私は地域計画にかかわらせていただいて、どうしても横並びしてほしいという思いがあるのですが、16地区同じものを16全部にというわけにはいかないんだよというあたりをどう調整していくかということだと思います。

ひとつは、今日お話を聞いていて、QOL、自分たちがそこに住んでいる生活の質をどう高めていくか、16地区、地域計画を立てる中である程度考えてきている面もあると思います。

例えば、あなたの所には道路はつくらないけれど農業政策の部分である程度頑張っていくというような部門が違うような施策を住民が考えているようなQOLに合わせて納得してもらって、行政が縦割りを超えた施策の仕方をしていかないと、いつまでたっても道路を平等にということになってしまうのかなと感じました。

コンパクトというところで、果たして農村が

コンパクトになれるのかどうか。16地区で、これだけたくさんあると核を持ってなくなってくる地区も出てくる。

そのときにコンパクトという考え方、用語を使ってはいけないのではないかという考えかたもあります。

病院、小学校。商店がなくなっていく、なくなってしまった地区は核がないのですが、それをどうしたらいいかというあたりは点ではなく線ということで、隣の地区との交流ラインにある程度集約していくという風になっていくのではないかと。中心から隣地域から連れてきて、そこでばらけさせる、交流が一つの集約するラインになるようになるのではないかと思います。

それから、農村計画にも属しているのですが都市はコンパクトというのを見せてきていますが、農村はあまり議論されていない見えてきていません。その辺りは後で教えていただきたいと思っています。

高橋 敏彦

今までのお話で、あじさい型都市というのはイメージでありますので、具体的に幹がどうなのか、それぞれの地域のかたちがどうあるべきなのかを目に見えるようなかたちにしていかなければ優先順位をつけるにしても、基準が出てこないということですので、その作業が必要であるということと、鈴木先生からは土地利用についても16地区それぞれのエリアで考えるべき、要するに白地地域についての規制についても考える同時に農業を再生させてあげなければ両立しないというお話がありました。

若菜さんからは、北上地域の中にも将来が心配される地域があります。その地区のなかに小学校がなくなりそうな地域、生活拠点機能が維持できなくなりそうな地域が予想されます。

そういったことを考えて、農村のコンパクトシティをどう考えるかが大きな課題になりつつあります。鈴木先生、どうしたらいいのでしょうか。小学校には数人の子供達しかいなくて、隣の小学校と一緒にいるかというようなところが出てきています。そこにはコミュニティはあるのですが、拠点になるものがどんどんなくなってしまうじょうきょうになりつつあります。そういったときの考え方をお聞きしたいのですが。

鈴木 浩 氏

この16のなかにそういう地区があるのです。つい最近、ヨーロッパを旅行したときに、ドイツやフランスの土地を飛行機から見る機会があったのですが、ヨーロッパの農村部は耕作地、森林、集落は本当にみごとにメリハリがきいています。

例えば、集落と言われるところに沿道ができ、固まっていて、いわゆる周辺の耕作地にはほとんど人家や建物らしいものが建っていません。やはり農村といえども、寄り集まって住むことの大切さは向こうの方でも考えられていて、イギリスの田園風景のなかの集落でも、20件、30件しか固まっていないところでもパンを売りに来たりします。その土地利用、農村計画を考えなければいけないとすごく思います。

今、お話のように小学校がなくなるなかで、一つのかたまりがなくなるかもしれないということに機縁するかもしれない将来の問題があるにしても、私は今のような集落機能をもう少し高めるようなことを考えていく必要があると思います。

福島県に檜枝岐というところがありますが、ここは数十年の間にすごい時間をかけた集落再編をやったところですよ。

なぜできたかという、檜枝岐の役所の半径500mぐらいのところ、全戸に温泉をひいたのです。温泉をひいて、自分達で民宿・ペンションを経営しようじゃないか、村の戦略として、そこに温泉を引いたので30年ぐらいかかりましたが、気がついたら集落再編が行われました。長い時間をかけて、ある魅力を以ってうまくやっているとところもあるので、それも可能だということが一つです。

それから、今年度から福島でやりはじめたのが、そういう集落に大学生と過疎集落の交流事業をやりはじめました。今年は8か所、大学生が過疎集落に入り込んで、大学生がお年寄り、その家から出て行った子どもたちのヒアリングなどもやりながら、この集落は消えるかもしれませんが、墓は誰が守るのでしょうかなんて話をしながら、交流事業をやっています。

入り込んだ大学生はわずか8か所だったので、東京の立正大学や東北大学、福島県下の大学など分担をしてやったら、どういうことになったかという、大学生同士がいろいろな所

に行って、おもしろい体験をしたので、集落についての研究会を横並びでやろうではないかという動きが勝手に出てきました。

それから、集落の側で大学生に繰り返し来てもらうためにはどうしたらいいかという戦略会議もできて、それぞれの集落ごとに戦略を考えることをやりはじめました。そのなかに1か所ですが、お年寄りたちが一生懸命神経を使って、洋便器のトイレにするとか水洗にするとか頑張ってくれた家がありました、わたしたちはそんなことを期待しているわけではありません。農村生活がどういうものか都会にいる私たちが知りたいのです、そういう価値観というようなことができてきて、私は農村については都市の人たちとどう交流するかというようなところがこれからの見通しをつける上で重要な作業かなと取り組んでいるところです。

北原 啓司 氏

先ほどの若菜さんの意見には賛成しません。農村をコンパクトシティにするなんて一言も言っていない。

我々が言っているのは、東北でコンパクトシティを考えると、農村部をどう位置づけるかという話であって、コンパクトシティの話ではどうしても中心市街地の話ばかりしてしましますが、農村とか1個の単位をちゃんと自立させるかたちで、それを北上ではあじさい型といっています。

しかし、あじさい型プランの中でもその存続が不可能な地域があるものですから、だからネットワークを組んで、そこに何もなくても隣の公共施設と連携させていこうとか、小連携ができます。それが東北発コンパクトシティと私たちが出しているものです。

つまり、一つの概念として一つの農村部を完成された一つのコンパクトシティとして濃くしていこうということではなく、いろんなものがあって存続していけそうところ、やばいところ、そういう状況のなかで1個1個の単位を、16地区全部が持たないかもしれないですが、それを持つ・持たないで考えるのは客観的な話であって、限界集落というところでもその集落の人たちはずっと住んでいるわけであって消えません。

そういうところの人たちと自分たちの将来像

とか何が足りない何を足すというようなことをやろうというのが、16の懇談会、地域づくりの話になってくると思います。

そういう状況の中で、自分たちがこれはまずいな、成り立たないと思ったら、今までだったらコミュニティセンターとか学校とか何とかしましょうとなりましたが、都市づくりの時代だったらできたけどもうできません。

そういうときに、どこかの面倒をみななければいけない、ある部分では申し訳ないけれど統合しなければならぬ。

しかし、そのときの単位は統合された世界で考えるのではなく、連携された中で今までの一つの単位がどのように生活を高めていけるかという世界で、近くではなくなっただけ隣との連帯集落のような、それを含めて、コンパクトシティという話であって、農村をコンパクトシティという話ではありません。

東北のコンパクトシティを考えると、東京とかとは違って、農村部が周りにたくさん広がっているのをどうやって関連付けてコンパクトシティと言い切るつもりですかという答えに対して、ここの部分を連携させていくときの幹をどうするか、コンパクトシティにしようという話をしたときに、先ほどの若菜さんが言ったことは間違っているわけではなく、1個1個のだめになるところは、ダメになっても住む人はいるのですから、その計画をどう描くかというとき、幹の力を借りなければいけない時もあると思いますが、周りとの連帯しようというようなことは市でも言ってもかまわないと思います。

若菜 千穂 氏

農村はコミュニティは残るんですが、生活拠点がなくなっていきます。そのときにどうするかということですね。

北原 啓司 氏

連携するしかないと思います。

高橋 敏彦

そのなかでは地域間の交通が出てくるだろうと思います。まとめになります。今日はコンパクトシティの考え方、大きく2つ出てきました。ひとつは都市の一つの構造としてのコンパ

クトシティのありかた、それから今提案しているあじさい型のそれぞれの地区のQOLを高めるための工夫、一つ一つの地区が連帯するとか線上に考えると交通を考えるとといった方向性を具体化していかなければならないという示唆をいただいたのではないかと思います。

その宿題をいただいたので1月23日にこれをバージョンアップさせてフォーラムを開催したいと思います。

その時には、コンパクトシティがちょっと見えてきたというあたりまでに仕上げていきたいと思いますので、またおいでいただきたいと思います。本日の意見交換を終了させていただきます。ありがとうございました。